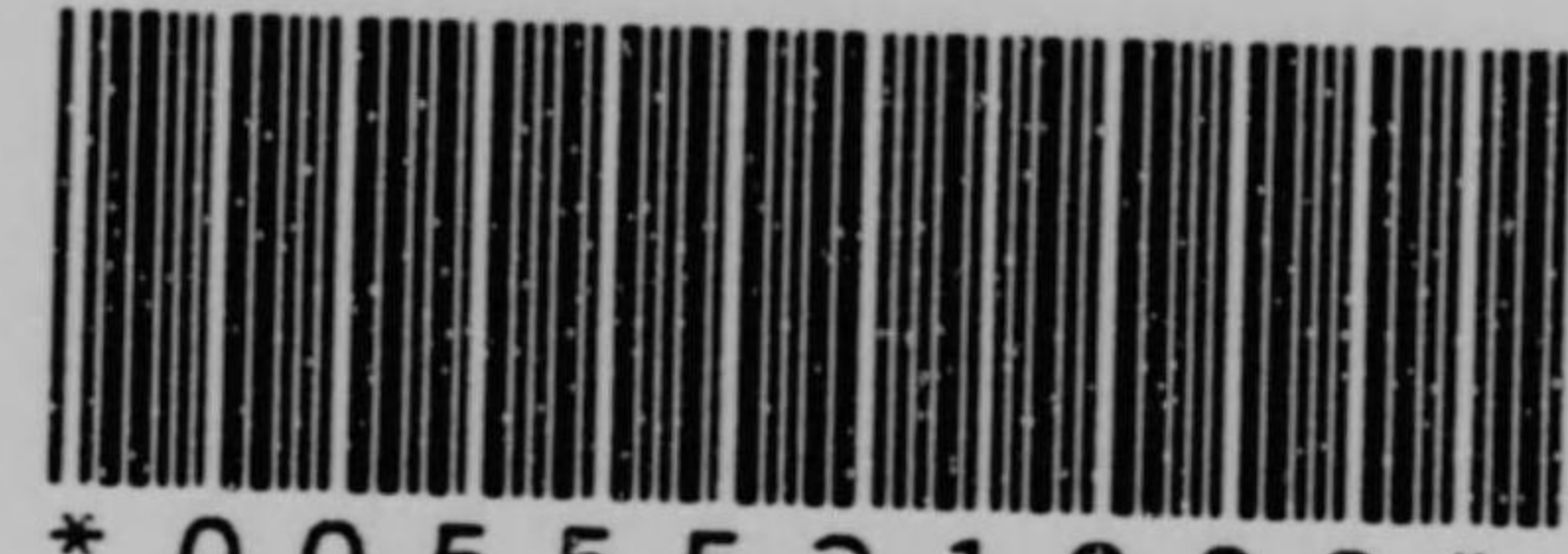


792

165



* 0055531000 *

0055531-000

792-165

明治海将伝

菊池寛・著

万里閣

昭15

AJA

25-512



菊池

海

寬

將傳

著



廣



萬

通教筆

792
165



明治海將傳目次

伊東祐亨	樺山資紀	川村と中牟田	榎本武揚	勝安房
.....
三	七	五	元	一

勝安房

海軍武士道	權兵衛と隼太	八代大郎	東郷平八郎	秋山眞之	上村彦之丞	山本權兵衛
.....
二九七	二七一	二九〇	二三三	一八七	一六一	一五三

明治時代の海將を語るには、第一に勝安房を挙げねばならぬと思ふ。

西郷と會見して無事江戸城を開け渡したといふ事も、彼の功績だが、もう一つの功績は、わ

が國近代海軍創設の基を築いたことである。

勝は、崩壊に瀕した幕府方の人でありながら、識見卓抜、彼の言動は、すべて新日本の建設

に寄與してゐる。

勝安房は文政六年正月十三日、江戸本所龜澤町に生れた。

舊名は養邦、通稱麟太郎、海舟と號し、安房守に任ぜられたから、世に勝安房の稱が聞えて



劍を島田見山に修め、永井青崖に蘭學を習つた。

家計頗る困難であつた爲に、勝は、非常な苦學をして、他人の寢てゐる間だけ蘭書を借りて
寫したといふ。

また、日本橋と江戸橋の間の本屋で立ち読みばかりをしてゐたといふ挿話もある。後、彼は、自分の學業の資金を得る爲私塾を開いて、子弟を教へるやうになつた。その頃から、その聲名は、西洋流兵學者の間に聞えてゐた。右近將監大久保忠弘（後の一翁）が、彼の才學識見を認め、幕府の當路者に對して意見書を提出するよう勧めた。

安政元年九月、麟太郎は、「海防に關する意見書」を、時の閣老阿部正弘に提出した。

翌年正月に至り、初めて蕃書翻譯所出仕を命ぜられ、翌月、大久保に従つて、大阪近海、伊勢及び和泉、紀伊等の海岸視察を命ぜられ、二十三日に江戸を出發して、三月中旬歸途につき、相州地方、品川海岸の海防線を視察して歸つた。

長崎海軍練習生時代

幕府はオランダ軍艦の艦長グアービスの度々の進言により、安政二年、長崎に海軍傳習所を設けることに決定した。奉行所の西役所を、その教場として、旗下、並びに諸藩より傳習生を派遣して、業を受けさせた。

別に水夫を養成するために、古來航海を以て業とし、足利時代、戰國時代には倭寇として支那邊海に乗り出した傳統を持つ讃岐國鹽飽島民を募つて、艦内及び陸上傳習所に於て、航海の諸技を學ばした。

これが、わが國最初の海軍兵學校である。

勝麟太郎も、選抜されて、その傳習生となつた。

幕府より派遣された傳習生約四十名許りの外に各藩も、鹿兒島藩十六名（中に五代才助友厚川村與十郎純義がゐる。）熊本藩五名（中に池部啓太がゐる。）福岡藩二十八名、萩藩十五名（中に松島瑞益がゐる。）佐賀藩は、長岡に接近してゐる爲と、従來外國交渉に關する職掌を司つたのと、藩主鍋島閑叟が、西洋文明輸入に汲々としてゐた關係で四十八名（その中に中牟田倉之助がゐる。）津藩十二名、福山藩四名、掛川藩一名の傳習生を出してゐる。

幕府の末路に當つて文武兩方面に活躍した人も、維新の偉業に賛賞し、また、實業界に奮闘した人物も、此所から出てゐるのは注目すべきことである。

後に海軍總裁として、幕府の海軍を率ゐて五稜廓に戦つた榎本釜次郎も、新日本海軍建設に殊勳のあつた川村純義も、海軍大將として最初の軍令部長となつた中牟田倉之助も、また、大阪の商權を左右した實業界の大立物五代友厚も、亦、皆、傳習所の傳習生として共に机を並べ

たのであつた。

勝は、それ等の偉材、俊才の中心人物であり、指導者であつた。傳習所の學科並びに教官は次の通りである。

- | | |
|-----------|---------|
| 航海術並びに運用術 | ペルスレイケン |
| 造船學並びに砲術 | スカラウエン |
| 船具學並びに測量學 | エーグ |
| 算術 | デ・ヨニング |
| 機關學 | 機關司 |
| 砲術訓練 | セルジアント |

これを、オランダ語で教へられたのである。

勝の「海軍歴史」に、

其の教授の時間は朝八時に始まり、十二時に終る。午後は一時より四時に至る。是れ陸上の教示なり。又時々艦上に就て其の運轉、諸帆の操作等、實地演習あり。悉く暗記せしめ、敢て書記せしめず、其の言語の不通なるを以て通辯數名を役す。故に彼我互に隔靴の思ひあり。教官は大に其の教示に苦しみ、生徒は又暗誦に苦しみ甚だ勞苦す。矢田堀、塚本、永持氏の如きは、昌平學校に漢書を學び、早く學中少年才子の譽、英敏の聞ありと雖も、猶今日暗誦に刻苦す。其の才之に及ばざる者の如きは、困苦の甚しきも亦宜なる哉。困學此の如く、後二三箇月を経、少しく澁滯を免れ、前途期すべき頼あるを覺えたり。と書いてある。

實に、今日から見ると夢にも及ばぬ、苦學振りである。

しかし、傳習生一同の熱烈な向學心と、監督者たる永井玄蕃頭の統率宜しきを得た爲、一人として不平を言ふ者なく、課業は、順調に進んで行つた。

當時の教官ペルスレイケンが、長崎を去るに臨んで、勝に、その才能を讚め、合せて日本の將來を祝福した手紙を送つてゐる。

それを見ると、勝が如何に外國教師にも信頼されてゐたか分かるのである。

勝も、オランダ人教官の教へに感謝して「海軍歴史」の中に、

我が海軍の基礎を爲せるは、主として教師諸人、及びゲティ船將、グアービス氏の誘導訓誨の厚きに因らざるばあらず。嗚呼其功忘るべけんや云々。

と言つてゐる。オランダ教官の一人が、

「學業の餘暇には、努めて市街を散歩して、何事にもよらず、見聞を蓄へておけば、必ず後日の用になる。」

と言つたのに従つて勝は、傳習の餘暇には、必ず、ステツキを携へて、長崎の市中を歩き、

江戸に歸つても、この習慣を續けて一般市民の生活状況を觀察して歩いたのである。

後に、幕府瓦解の時、勝が江戸が灰燼になるのを救ひ、市民を鎮撫したのは、斯様にして養はれた彼の社會觀に依るものだと言はれる。

永井の去つた後は、監察岡部駿河守が監督してゐたが、幾何もなく、監察木村圖書（攝津守名は毅、芥舟と號す）が來て、徳望を以て、傳習所取締を行つた。

その秋、勝は、三日間の休暇を得た。

彼は、この休暇を利用して、オランダ教官の指導を受けずに、傳習生のみで、航海をしようといふ計畫を立て、教師に許可を受けに出た。

すると教官は、

「何分、秋のことで、日本の海岸は天氣が變り易い。何時、颶風が來るとも知れない。諸君の技倆は未だ暴風激浪を凌ぐには足りないから、秋が過ぎてからやつて見てはどうか」

と言つた。

然し、鬱勃たる霸氣に燃える勝は、

「私も、海軍の傳習生であります。風波を何で怖れませうか。風波を冒して航海することも、わが心膽を鍊磨する一端であります。どうか許して下さい。」

と熱心に頼んだ。

そこで、教師も折れて、

「成程、君の言ふことも尤もだ。それでは、許可するから求めて危険な所へ行つてはいかぬ。また、沖へ出たら、地方から十數里以内に止まつて、それ以上出てはいかんぞ。」

と言つて、竟に許してくれた。

勝は、大いに喜んで、傳習生柴弘吉以下七八名、水夫六名を連れて、船に帆を張り、五島方面に向つて出發した。

ところが、沖へ出ると間もなく、勝の船は教師の注意した通り大暴風雨に遭つたのである。その時のことを、後日、勝は「斷腸之記」に、次の如く書いてゐる。

時に微雨降り風及逆帆を操り、斜走回轉法の如し。時に南西黒雲掩天。須臾艦頭を覆ひ、暴風雨濤を捲き來る。我輩力を極め、帆を收め、甲板上是を凌ぐ備をなすと雖も、心中先づ狼狽、水卒指揮に反し、風濤強暴の勢名狀すべからず。各必死を期し、横に肥前地方に寄りむとす。然りと雖も、術拙にして船意の如くならず、瞬間にして元路に吹流され、高島々頭にあたり、碎破せむとする。勢名狀すべからず。余諸士に令し、錨を投じ、此力を以て須臾勢力を寬にせむとす。然るに、鐵鎖三十尋に及べども、少感なく、終に暗礁に當り、衝突二回、舵抜孔を生じて海水侵入防ぐべからず。此時余大に呼んで曰く「不肖教師の令を用ひず、微力を察せず、諸君をして此の危難に臨ましめ、且船を破摧す。何の

面あつて再び生ぜむや」と。この一言を聞いて諸士水卒勇氣凜乎、令に應じ、手足を働かすが如く、幸にして船暗礁を離る。又幸にして風力雨勢大に減少す。終に肥前地方に向ひ、斜に走り入る。此力を合し破帆を補ひ、流失の諸材を修め、穿孔を塞ぎ少しも怠らず、曉に及んで風雨止み、晴日を得たり。一日大に船を修覆し、終に他の助けを待たず歸航するを得たり。直ちに教師に面し、其顛末を告げ、其命を用ひざるを謝す。教師カンテンニキ之を聞き、微笑していふ「今より後、船舶の運轉君に任すべし。凡席上の傳習熟すと雖も、危険に逢遭する景況十度は十度の變あり。一樣ならず、何ぞ口頭の能く傳ふる所ならむや。一度生死の際に逢はゞ、其の苦境を以て心中に自得する所あらむ。是を以て變化の術も亦自然に生ずべし。解せる哉」と。余是を聞いて、學問と實際の區別を覺了し深く其教示に感服し、又萬般の事活用の妙微に及べば口頭にあらざるを省悟す。

まことに、良師賢生徒と言ふべきである。

同年末、曩にオランダで造られた軍艦ヤツパン（後威臨艦と命名）に乗つて、勝は、五島から對島に航し、日本海の西北岸を測量し、釜山沖に進んで、遙かに朝鮮半島を見て歸つた。

當時、幕府が條約交換の爲に使節をアメリカに派遣しようとする意向であるのを聞いた勝は雄心勃勃、渡航を望んで、江戸へ歸ることを願つた。

安政六年正月に至つて、勝は始めて、歸府を許され海軍操練所教授方頭取を命ぜられた。

勝が、汽船朝陽丸（オランダ製威臨艦の姉妹艦）に乗つて、江戸への歸途につくと、又、暴風雨に遇ふた。

最も烈しかったのは、紀州大島を去る三十里の沖であつた。

船は、マストを折られ、舵を取られ、揉まれ揉まれること一晝夜、終に、體を帆柱に縛りつけてゐるが、その繩も断たれて、あはや逆浪に捲かれんとして、わづかにその危難を免れるこ

とを得たのであつた。

勝の歸府後一ヶ月、安政六年二月、井伊直弼大老となるに及んで、長崎の海軍傳習所は、突如閉鎖された。

太平洋横斷

勝が江戸へ歸ると、幾何もなく、安政五年の日米修好の條約の調印に特使新見正興、村垣範正、小栗忠順がワシントンへ派遣された。使節は、米艦ボーハタン號に搭乘して行つたが、別に、軍艦奉行木村圖書が威臨丸に搭乘して行つた。勝は、選ばれて、威臨丸の艦長となつた。

この船には、後の新日本を背負つて立つた青年達が乗つてゐた。肥田濱次郎、中濱萬次郎、海軍中將男爵赤松則良、福澤諭吉も搭乗者だつた。

咸臨丸は、軍艦とは言ふものゝ、安政六年にオランダで造られた、噸數二百五十、馬力百、大砲十二門を備へた小汽船で、港の出入りに蒸氣を焚くばかりで、航海中は帆をあげて、風を便りにした。

この小さな船に、洋式航海術を習つてわづかに五年しか経たない艦長が乗つて、途中、暴風雨に遇ひ乍らも、一ヶ月後兎に角、太平洋を横斷してサンフランシスコに着いたことは、新日本海軍のために、氣を吐いたと云つてよい。

これに勢を得た勝は、更に、南米方面へも廻航を企てたが、使節達に止められて實行されなかつた。

アメリカでは、非常に珍らしがられも驚嘆されもしたが、間もなく、ハワイに寄航して浦賀

へ歸つて來た。

そこで初めて、勝は、四五日前に櫻田門外で伊井大老が水戸の浪士に殺されたのを知つた。

このアメリカ行は、アメリカ人土の間に日本の存在を知らしめると共に、一行は運用航海の術を實地に習得し、海外の形勢を目撃することを得て、幕府海軍の發展に資する所があつた。

勝の海軍建設案

文久元年五月、幕府は開國のやむべからざるを認めて、西洋諸國の兵制を調査して海陸軍を建設することに決し、池田甲斐、木村攝津などに海陸軍備、並びに軍制取調委員を命じ、勝麟太郎、大關肥後等に軍制取調を命じた。

當時の委員、取調は十數名の多きに達してゐるが、海軍建設の具體的立案者は勝であつた。

勝は、日本帝國百年の大計として、強力な新海軍の建設の必要を力説した。彼は、委員として江戸、大阪兩灣の防備を完全にするの外、東海、東北海、北海、西北海、西海、西南海の六艦隊を組織する案を立てた。然しこの案は唯計畫たるに止まつて終に實行されなかつた。

文久元年九月、勝は天守番之頭格講武所砲術師範役を命ぜられたが、越えて二年七月、二之丸留守居格軍艦頭取となり、閏八月には拔擢されて軍艦奉行並となり、勤務中千俵高を給され

た。
この年八月二十日、閣老、參政、大監察、小監察、勘定奉行、講武所奉行、軍艦奉行が登營して、將軍家茂の御前で、軍制建設、海軍擴張の會議をした。勝も亦軍艦奉行として出席した。それ迄軍艦奉行は、海軍の技術を司り、艦隊の將士を指揮すべき機能はあつたが、大政に參與するといふことはなかつた。

如何に、當時の内外の形勢逼迫を告げてゐたか、また、勝の存在が認められてゐたか知るべきである。
この會議において、

「わが國に軍艦三百餘隻を製造し、幕府麾下の士をして、海軍に従事せしめ、海軍の實權を掌握し、艦隊を東西南北に置かんせば今より何年を期して其の効果を奏し得べきや」と訊かれた。

勝は、
「海軍の全備は五百年の後ならでは、その目的を達すること能はぬ。軍艦は若干歳を期して充實することを得べきも、海軍士官、及び技術家の熟練は多くの歳月を積まねばならぬ。徒らに多くの艦船を製造し、水兵を増加するも、國防に關する學術、並びに尙武の精神にして充實するにあらざれば、眞正防禦の實を擧げることとは困難である。」

と言つた。また、松平春嶽が、政事總裁として、勝に海軍擴張の策を訊ねた時も、勝は「當今の憂は、人才の缺乏にある。云々。」

と答へた。以て、勝の思慮深く、物事の核心を握む才のあることを知ることが出来る。

土佐脱藩の勤王の志士坂本龍馬が、勝の開國論を不満に思ひ、事に依つては勝を刺し殺さうと氷川の屋敷に訪ね、却て、海外の事情を聞かされて、勝の見識、人物に打たれて師弟の約を結んだといふ有名な話も、この頃のことである。それ以來、龍馬は、勝に、ひどく傾倒して、大に啓蒙されるところがあつた。

兵庫海軍塾時代

文久三年四月將軍家茂は、上洛を機として、勝の獻言に據り、順動丸に乗つて攝海警備の實況を視察した。

これは、今日に於て、總理大臣が飛行機に乗つてわが沿海地方を視察するよりも一大事であつたのだ。勝は、その獻言者であり、船の指揮者であり、扈從の説明者であつた。

將軍巡覽の後、幾何もなく、朝廷に於ける尊攘派の先鋒、姉小路公知も、長藩の桂小五郎等有志七十人をつれて大阪に來り、順動丸に乗つて、攝海の警備を視察し、その結果、勝の熱意と堂々たる主張に動かされて、公知は攘夷の思想を棄てた。姉小路は、五月二日歸京、直ちに參内して、攝海の事情を奏聞して、海防に關する意見を言上したが、その思想の急變のせい、か、二十日刺客に襲はれ、二十五歳を最後として薨去した。勝は「歎息愁傷に堪へず」と述べてゐる。

將軍家茂は、攝海巡視の結果、我海防の一日も忽せに出來ぬことを覺り、地を小野濱に相し

て、海軍營所を建設せんことを勝に命じた。將軍の旨を奉じて神戸海軍操練所を建設し、併せて長崎製鐵所をもその附屬とした。

當時、朝廷には攘夷の論喧しく、將軍家茂は詔勅を奉じて外夷拒絶の令を布くに至つた。

松平春嶽は攘夷に反對し、長藩は攘夷の期日を機として、下關に於て、米佛蘭の船艦を襲撃して、攘夷の火の手を上げた。薩藩は英國艦隊の來襲に應じて、激戦二日に及んだ。

かゝる時代に當つて、勝は、一人世界に於ける日本の位置を洞察して、帝國海軍の基礎となる可き、天下の人材を、兵庫の海軍塾で養つてゐたのだつた。兵庫海軍塾即ち海軍操練所は勝が幕命に依り建設した海軍兵學校であつたが、結局勝の私塾の觀を呈した。その勝を助けて或は資金の調達に走り、その規畫を助けて、塾頭となつた者が、坂本龍馬である。龍馬が勝の許に働くことを如何に生き甲斐あることとしてゐたかは、その家信に、

(此頃は天下無二の大軍學者勝麟太郎といふ大先生の門人となり、ことのほか、かはいがられ

候て、先づ客分のやうなものになり申候。近き中には大阪より十里餘りの地にて兵庫と申す所にて大きに海軍をおしへ候所をこしらへ、又四十間五十間もある船をこしらへ弟子共にも四五百人も諸方より集り候事)と傳へ同書の終りに、

(達人の見る眼は恐ろしきものとや、つれづれにもこれ有り、猶エヘンくかしこ)と大いに得意になつてゐるのが分る。

海軍塾には、幕府麾下の士もあつたが、西南諸藩の人士が多かつた。黄海の海戦で勇名を轟かした、海軍大將伯爵伊東祐享、維新の後外務大臣として活躍した伯爵陸奥宗光(當時伊達陽之助と言つた)もその時の門人である。

維新の三傑の一人長藩の桂小五郎、對馬藩の大島友之丞、久留米の神官眞木和泉も屢々勝に教を懇ひ、感化をうけた人だ。

勝は、間もなく、將軍の東歸に隨徒して、順動丸を指揮して、大阪を發し江戸に歸つたが、

越えて八月十三日、海陸備御用拔に任ぜられた。將軍の再上洛の時には、勝は再び軍艦奉行として斡旋した。文久三年十二月二十七日軍艦翔鶴丸に乗つて家茂は品川灣を發した。勝は、その艦長だつた。翌日、浦賀に碇泊中、將軍は手づから酒を勝に賜ひ、

「航海の事はすべて卿に委任す」と言はれたといふ。

元治甲子禁門の變が起るや、勝が幕臣であり乍ら勤王の志士と交はり、神戸の海軍塾は倒幕派の集會所であるとして、勝は、嫌疑を受けて、十月歸府を命ぜられ、次で屏居を命ぜられて赤坂氷川に閑居生活を送るに至つた。

勝の東下の後、坂本龍馬は、海軍塾の有志を率ゐて海援隊を組織し、王政復古に活躍したが彼の一生の大事業薩長藩聯合は、勝の學國一致思想の感化であるといふ。

事實、勝の心中には、如何に日本を破壊せず發展させるか、といふことのみ眼中にあつたのだ。

經世家として活躍

然し、時代は、勝をその儘に閑居さすことを許さず、一年半の後、慶應二年五月二十七日の夜、突如登城の達しがあり、翌二十八日には、軍艦奉行再勤を拜し、至急上阪を命ぜられた。

それ以來、會薩兩藩の調停、將軍繼嗣問題、長州藩の始末などに大いに力を盡したが、再び、幕閣より疑はれ、恰も西南人の間諜の如く猜疑された。そこで、勝は微才大任に堪へずと稱して退職を乞ひ、慶應三年十月朔日歸府を命ぜられ、翌年三月より英國海軍傳習の事を掌ることゝなつた。此所に、勝は再び、志を得ない生活を送ることになつた。然るに、時代の動きは、この時に於て、最高潮に達して、遂に伏見鳥羽の戦ひに依つて、幕府は賊徒の悪名を

受け、勤王の軍に追討される運命となつた。

將軍慶喜が上方より歸るや、勝は再び擢でられて、軍艦奉行となり、幕閣の政治の中樞に參與し、恭順論を唱へて、遂に慶喜を動かし、大政奉還となつた。また官軍が東上するや、命を賭して西郷と會見、有名な江戸城明け渡し大業を行つた。

官軍東海道を上ると聞いて、勝は、陸兵を箱根に配置し、幕府方の軍艦を駿河灣に並べて、官軍を迎へ撃つ案を持つてはゐたが、實行はしなかつた。もし、實行されてゐたならば、結果は、どうなつてゐたか、豫斷を許されないものがある。

江戸城明け渡しと共に、幕府の海軍は、すべて、新政府にうけつがれることゝなつたのである。

勝は、暫く野に下つて、後、明治政府に仕え、明治六年十月二十五日、參議兼海軍卿に任せられた。更に、元老院議員、樞密顧問官に歴任して、明治二十九年十月老を以て辭表を提出し

たが却下され、同三十二年一月十九日腦溢血にかゝり、二十一日薨去。

明治天皇には、勝生前の勳績を嘉せられ、特に日根野侍従を遺され優渥な勅語を賜つた。

榎本武揚

我國海軍創設の基礎を築いた人々の中に二人の幕臣が居る。

勝安房と榎本武揚である。

勝は、只管、平和裡に事を運ぶのを念願として、官軍に歸順を誓ひ、江戸城を明渡したが、榎本は、それに不満で、幕府の艦隊を率ゐて北海道に奔り官軍に抗した。

榎本の名を高からしめるものは、後々の外交家としての手腕もさる事乍ら、實に、この所謂「函館戦争」によるのである。

生　　ひ　　立

榎本武揚は、幕府の御徒士榎本園兵衛の次子である。天保七年八月、江戸下谷御徒士町柳川

横町で生れた。舊名は、釜次郎と言ひ、號は梁川と稱した。生れ土地柳川横町に因んで、初め柳川と言つたが、それでは、どぜう鍋に通じるので、梁川と改めたと云ふ。

父の園兵衛は、備後の生れで、榎本家に養子に來た人で、數學に秀でゝゐた。母は、一橋家の臣林大次郎の娘である。

四人姉弟で、武揚の上に兄がゐて男二人、女二人である。

武揚は、多くの人々が一致して言ふ如く、一言にして言へば、所謂「江戸ツ子」であつた。物に熱し易く、短氣で、情に厚く、進歩的であつた。

幼い時から、近所の漢學者田邊石菴に就て學問をし、儒學者友野勇助（霞舟）の門にも學んだ。

十二歳の時、昌平費に入り當時一流の大家、佐藤・松崎・鹽谷などの碩學に就て學んだ。武揚は、儒學の大家に成らうと、懸命に勉強したので、大いに學業も進んだ。

安政の大地震の時、武揚は、恰度、昌平費で易經を學んでゐたが、大地震だと知ると、窓から飛び出して、一目散に走つて家に歸り、母の無事な顔を見て、抱き合つて喜んだといふ。

昌平費では、三年目毎に大試験があつて、甲乙丙の三種類に採點され、甲乙の者は直ちに官吏として重要されるが、丙の者は、只、勉強をしたといふ證明書を貰ふだけであつた。

學ぶこと五年、武揚十八歳の時の昌平費の試験に、彼は、熱心な勉強にもかゝはらず、意外にも、丙であつた。

そこで武揚は、儒者にならうといふ望みを棄てなければならなかつた。

恰度、その頃、幕府は海軍奨励のため、長崎に海軍傳習所を設けて、旗本及び各藩の子弟に海軍技術を學ばしめた。

それを知つた武揚は、熱烈に、海軍に入ることを希望した。再三、再四、當局に、長崎海軍傳習所入りを數願したが、許されなかつた。たまく、昌平費の同窓である伊澤金吾といふ

少年の父が、伊澤美作守と稱して、長崎奉行であるのを知ると、武揚は、伊澤の屋敷に行つて頼み込んだ。美作守も仕方なく、武揚を若黨として、長崎へ連れて来て、傳習所の員外生として學ばしめた。

武揚は、傳習生の資格がないから、他の生徒達と机を並べて學ぶことは出来ず、教室の片隅で聴講しなければならなかつた。

傳習生の中には、勝安房、五代友厚、川村純義、中牟田倉之助等の後の日本海軍建設の功勞者が洋々たる希望を抱いて學んでゐた。

武揚は、熱心に勉強したので、成績は、却て、他の傳習生よりも秀れてゐた。彼は、此所で初めは、オランダ人ハルデスに就て、機關學を修め、後、新任のオランダ士官カツテンダイケに學んだ。

安政五年、優秀な成績で海軍傳習所の課程を終へて、江戸に歸つた。

幾何もなく、彼は、優秀な頭腦と強固な意志を認められ、他の傳習生に先んじて、拔擢されて、新設の築地海軍操練所の教授を命ぜられた。

オランダ留學

文久元年、幕府は、オランダへ軍艦開陽丸の建造を依頼し、その監督を兼ねた留學生を派遣した。

二十七歳の武揚も留學生として選抜された。

行を共にした者に、取締内田恒次郎（三十四歳）・澤田太郎左衛門（二十六歳）・赤松大三郎
林研海・西周助等がある。

一行は、六月、長崎からオランダの船で、出帆した。
出帆後数日の間は、風もなく、波静かで、乗組の一行の意氣天を衝くばかりであつた。
船が印度洋にかゝる頃、武揚は、涯し無い滄海の波濤を眺めて聲高らかに詩を賦した。

路入南溟已幾千
海風吹夢日如年
强將午睡爲清課
政是家鄉窮臘天

彌月天涯没寸青
長風相送入南溟
船頭一夕警過冷
巽位漸高十字星

帆影參差月似弓
大洲東去有無中

船頭一夜笑相祝
又駕南球貿易風

間もなく、船が瓜哇の北東に來た時、暴風雨に襲はれて、忽ち海中の暗礁に乗り上げた。
暗夜、暴風雨は益々猛烈となり、怒濤は山の如く、船は、今にも顛覆するかと思はれた。
斯くと見ると、船長のオランダ人は、乗員達と共にボートに乗つて、本船から逃げ去つてしまつた。
榎本等一行は、船長のゐない難破船に取り残されて、海底に葬られてしまふのを待つばかりであつた。
三晝夜の間、危険と餓えと戦つた後、漸く、一隻の船影を認め一同は、欣喜雀躍して、白布を振つて救ひを求めた。先方でも難破船と認めて、近付いて來た。見れば、それは、英國の商船だつた。榎本等は、もう救はれるものと大喜びしてゐたところ、英國船では、遭難者が白人

でないのを見て、その儘、船首を返して行つてしまつた。

一行の落膽思ふ可きである。

然し、翌日、一行を襲つて来た黒人共の海賊船を認めると、榎本等は、日本刀を振りかざして、逆に、海賊船に斬り込み、脅迫して、附近の小島に上陸した。

これは、プロレバルといふ無人島であつた。此所で四日間炎熱毒蟲に苦しめられた後、黒人に先導されて、瓜哇のバタビヤへ行つた。

バタビヤ滞在中、一行は、パイナップル、バナナ、マンゴーなどの珍らしい果實が山の如くあるのを見て、欲しい儘に食べて遂に、皆猛烈な下痢に罹つた。

一行は、列を作つて、頻繁に便所へ通ふので、ホテルのオランダ婦人達が窓から顔を出して笑ひ興じた。

怒りッぽい榎本は、

「何が可笑しいかつ、ベランメー」

と、日本語で、大喝一聲して、拳を突き出したといふ。

幾何もなくして、一行は、オランダ政府の好意に依り、便船を得てヨーロッパに向つた。

船中で、一行の一人（西周助）は、オランダに到着して、一行留學の目的を訊ねられた時に見せる手紙をオランダ語で書いた。

それに據ると、一行は、海軍のことは勿論、その外に、物理、化学、分析學、植物、地歴、オランダ語、ドイツ語、英語、フランス語、統計學、法制、經濟、政治を學び、哲學では、デカルト、ヘーゲル、カントの思想を研究したいと書いてある。

彼等の烈々たる向學心と意氣は、感歎の外はない。

彼等は、アフリカの南端喜望峯をめぐる、セントヘレナ島へ上陸して、ナポレオン一世の墓に詣でた。

熱血兒榎本は、この蓋世の英雄の墓の前を抵回して、容易に去らず、萬斛の感慨の湧き出でる儘に、

長林烟雨鎖孤栖 末路英雄意轉迷

今日弔來人不見 霸王樹畔列王鳴

と吟じた。

セントヘレナ島は一名をロングウッド島といふので、榎本は、長林と譯したのである。更に、カナリヤ島に立寄つた後、全航程半ケ年を費して、目的地たるオランダの首府アムステルダムに着いた。

當時、オランダでは、榎本が長崎海軍傳習所で教へを受けたカツテンダイケが出世して、海

軍大臣となり、次いで、外務大臣も兼任してゐた。彼は、日本人留學生の世話をライデン大學の東洋語學部教授ホフマンに委せた。ホフマン教授は、幕末日本へ西洋文明と學術を傳へたシーボルトとも知り合ひの碩學であつた。彼は、大いに、榎本等の世話をして、至らざること無かつた。

榎本等は、先づオランダ語を修得する爲、各自別々にオランダ人の家に下宿して、各々、専門の勉強をした。

榎本は、勿論、機關學の研究を専らにしたが、時々、開陽丸建造中の、セ・ピツプス・エン・ゾーネン造船所（アムステルダムの西南約十里のドルドレヒトといふ一小都市にある）へ出張した。

一行の滯歐中、デンマークとオーストリアの間に戦争があつたので、榎本は、自ら望んで、彈丸雨飛の戦線を馳驅して、西洋文明國間の戦争を目撃した。

後年、彼が開陽丸を率ゐて北海道で戦つた時に、この時の経験が、大いに役立つたのであつた。

又、その頃、モールス電信機が發明されたので、榎本は、直ちに、その機械を二臺購入して原理を研究し、使用法を習つて、日本へ持ち歸つた。これは、彼の先見の明を語るものと言へよう。

榎本は、オランダに留ること足掛け六年、開陽丸の竣成と共に、これに乗つて歸國した。時に慶應三年五月であつた。

榎本は、開陽艦長に任ぜられ、軍艦頭取、軍艦奉行に累進し、從五位下和泉守となつた。

まさに崩潰に瀕した幕府が、海外歸朝の新知識である榎本に、囑望するところ、如何に大きかつたかゞわかる。

品川脱走

榎本が歸朝して、間もなく、鳥羽伏見の戦が起り、官軍は勝に乗じて東征して來た。

徳川慶喜は、勝海舟の意見を容れて江戸城を開城して上野に蟄居して恭順の意を表はした。

この大混亂の時、榎本は江戸にゐるが、江戸ツ子氣質の彼には勝安房の平和策が氣に入らなかつた。

殊に、江戸城明渡しと同時に、幕府の軍艦全部を官軍に引渡すといふ降服條件が氣に喰はなかつた。

幕府の海軍總裁矢田堀景藏は江戸にゐて、副總裁榎本は軍艦に乗つてゐて、事々に意見を異

にした。

明治元年四月十一日、江戸城は事無く官軍に明渡されたが、品川灣の幕艦八隻の方は、無事に済まなかつた。

江戸城明渡しが終わつた後、勝安房が海軍所へ行くと、其所に來合せてゐた榎本は、怒氣滿面物凄しい勢で、勝の所置を非難した。

そして、

「今日は、風波が強いから、軍艦引渡しは明日に延期されたい」

と言つて、その夜、艦隊を率ゐて、館山灣に逃れた。

翌、十二日、榎本は、

「徳川家の領地祿高が決まるまで、軍艦引渡しは、延期され度い」

といふ意味の數願書を海軍先鋒總督に提出した。

徳川方は、非常に狼狽して、大久保一翁と勝安房にこの間の斡旋をさせた。その結果幕艦八隻の内富士山以下四艦を朝廷に納め、開陽、回天、蟠龍、陽春の四艦を徳川氏に保有せしめることにして、一應落着した。

然し、榎本は、彰義隊の殘黨に頼つて來られ、奥羽の諸藩が官軍に抗して立つたのを知ると遂に意を決して、開陽以下の四艦と帆前船數隻を率ゐて、荒井郁之助、松平太郎、永井玄蕃以下同志二千餘人と共に、品川を脱走して、北海道へと目指した。

彼の書翰によると、彼は、北海道を徳川家の領地としようと思つたからだつた。

函館戦争

榎本の率ゐる艦隊は、犬吠ヶ崎を廻り、仙臺沖に入り、遙かに金華山を見る頃、俄かに大颯風に遇つて、開陽は舵を折り、回天は帆樫その他器械を破壊し、蟠龍、咸臨は吹き戻されて下田に至り更に駿河の清水港に入つた。その他の帆船及び乗組んだ兵士、銃器、彈藥など、多大の損害を蒙つた。榎本は、残る軍艦を集めて、仙臺松島灣内の寒風澤の邊に着いて修繕すると共に、仙臺城下に滞陣した。

そこへ、幕軍の將大鳥圭介が土方歳三、古谷作左衛門以下二千五百の兵を率ゐて來た。又、星恂太郎が額兵隊士を率ゐて、榎本の許に來た。

一同、大いに喜び、勇氣百倍して、諸艦の修繕の成るのを待つて、北航した。

榎本等の艦隊は、十月二十日の夜、函館から十里の鷲木港に入つた。二十六日には五稜廓を占領し、更に、十月に入つて、松前、江刺、その他の主要地を攻略して、十一月二十日頃までには、蝦夷の地を勢力下に納めた。

明くる明治二年の正月には、新知識の榎本は、アメリカ合衆國の例に倣つて、選舉で役員を決めた。

その結果、榎本が總裁となり、松平太郎が副總裁、荒井郁之助が海軍奉行、大鳥圭介が陸軍奉行、土方歳三が陸軍奉行並となつた。

五稜廓に本營を置き、函館、松前、江刺に奉行を置いた。

その上で、榎本は、朝廷へ歎願書を奉つた。それには、榎本等の此の度の行爲は、官軍に抗する爲でなく、食祿に離れた三十萬餘の幕臣達の生活を擁護する爲に、蝦夷に移住して來たのであつて、日本國の北門の警護となるより他意無いことを述べてゐるのである。

然し、新政府では、榎本等を、賊軍と名付けて、征討の軍を起した。

明治二年三月、黒田清隆、山田顯義、中牟田倉之助等の諸將が薩長の兵を率ゐて北上し、三

月九日には、曾我進造等の率ゐる海軍が品川灣を抜錨した。

榎本は、これを聞き、荒井郁之助等に命じて、官軍の海軍を、南部領宮古灣にて迎撃しようとした。途中、暴風に遭つて、荒井郁之助の率ゐる艦隊は離散して、宮古灣に到つたのは、回天、只一隻のみだった。

明治二年三月二十五日、回天は、只、一隻で大いに官軍の艦隊と戦つた。

當時、三等士官として官軍の春日艦に乗組んでゐた東郷平八郎は、後年、この時の回天の奮戦振りを賞して、

「敵ながら、あつばれであつた」

と言つてゐる。

回天は、遂に、敗退して、函館に逃げ歸つたが、この戦ひは、わが新海軍最初の接戦として記憶されなければならない。

愈々、北海の風雪漸く熾まんとする四月、官軍は大舉して、蝦夷の地に殺到した。

當初は、榎本等の幕兵達も大いに戦つて、相方、一進一退の形勢であつた。

然し、榎本等の軍勢は、何分、援兵もなく、兵糧、彈藥の補給もつかないので、五月の初め頃から、漸次、敗退し始めた。

十一日には、さしもに誇つた、全軍艦は、或は沈没され、或は焼却して、盡く失つた。

函館附近の戦ひでは、土方歳三以下多数の戦死者を出した。

官軍に各占領地を攻略されて、榎本等は、遂に五稜廓と辨天砲臺を保つのみとなつた。

榎本軍の敗戦歴然となるや、官軍では、再三、使者を送つて降服をすゝめた。

榎本は、その厚意を謝したが、降服することは肯じなかつた。

五月十三日、又々、降服を促して來た時、榎本は、それを斷ると共に、使ひに、洋書二冊を托して、官軍參謀に贈つた。

その本は、フランスのオルトランの原著「萬國海上法」を、オランダ人フレデリックスが翻譯して、榎本に贈り、榎本は、オランダ留學當時から秘藏してゐたものだった。

榎本は、その本に添えた手紙に、

別冊二本、釜次郎阿蘭留學中苦學致候、海軍無二之書に付兵火に付し、烏有と相成候段、痛惜いたし候間、海軍アドミラルへ御贈り被下度候
と書いてゐる。

榎本の覺悟の程を知り得ると共に、我國海軍の將來の爲に、戦火の中から一書を敵軍の將に贈る彼の心情に打たれない者はなからう。

此の書と手紙を受取つた官軍側でも、黒田清隆以下、非常に感激して、直ちに、感謝の返事と酒五樽を送つた。

昨年来、長々の御在陣如何にも御苦勞に存候、陳は、貴下蘭國御留學中御傳習の海律二

冊、我國無二の珍書烏有に附し候段、痛惜に存ぜられ、皇國の爲め御差贈に相成候段、深く感佩致し候。何れ他日譯書を以て天下に公布すべく候。先は御厚意の段、拙者共より相謝し度候。輕微乍ら粗酒五樽、之を進じ候。傍ら一爐の御總客、御賑はしなされ度候也

五月十六日

海軍參謀

榎本釜次郎様

黒田清隆は、後に至り、此の本を、福澤諭吉に命じて翻譯させて、世に公にした。

戰場に於ける敵と敵との間に、實に得難い美しい話である。

然し、此の戦争に於ての榎本の美談は、未だ未だ盡きない。

官軍方は薩藩を除いては、軍規が亂れて、兵士共は、捕虜も負傷兵も手當り次第に斬殺し、家に火を付けた。

然し、オランダ留學中、西歐國の戰爭を目撃して來た榎本は、戰鬥能力を失つた官軍の負傷者達を、斬らないのみか、味方の兵と一緒に病院へ入れて手厚い看護をして、傷が癒えると、路銀迄持たせて、郷里へ送り返してやつた。

五月十五日、五稜廓が官軍から三面攻撃を受けて激戦してゐた時にも、榎本は、捕虜の官兵十一人を丸毛牛之助に命じて、官軍の陣地まで届けさせた。牛之助は、先づ、味方の射撃を止めさせてから、白旗を振つて、官軍の軍門に至り、捕虜を返してやつた。

榎本のこれ等の行爲は、いたく官軍の有志を感動させて、黒田清隆などは、榎本が降服する迄、五稜廓の攻撃は差控へさせた。

敗色が濃くなると共に、五稜廓では、逃走兵が百人許り出た。丸毛牛之助、大塚霍之丞の兩人は、憤つて、之を追つて斬らうとしたが、榎本は、

「去る者は、去らしめよ」

と言つて、二人を止めた。

五月十五日、辨天砲臺が、彈藥兵根盡きて、遂に、官軍に下つた。さすがの榎本も、此所に至つて、遂に、諸將士を集めて、

「自分は、衆に代つて、罪を官軍の軍門に謝し、潔く天誅に就かう」と、述べた。

諸將士は、泣いて、答へることが出来なかつた。

その夜、大塚霍之丞が、所要で、二階へ上つて行くと、榎本が端座して脇差で自刃しようとしてゐた。

大塚は、

「あッ」

と叫んで、飛び付いて、その刃を握つた。

榎本は、

「邪魔をするなッ」

と言つて、脇差しを動かしたので、大塚の掌が切れて、血が流れた。

愕いて、大塚は、大声で、同志を呼んで、遂に、榎本の刀を取り上げてしまった。

刀を取り上げられてしまふと、榎本も最早や仕方がなかつた。さう觀念すると、彼は、監視

の兵の真中で、悠然と高軒で寝てしまつたといふ。

翌、十七日、榎本は、松平太郎等と官軍の軍門に行き降伏した。

彼は、網張駕籠に乗せられて、行程四十日、六月三十日に東京に着いて入牢を命ぜられた。

榎本の母は心配の餘り病氣になつた。

母が重病と聞いて、榎本は、

「生前に一目だけでも逢はしてくれ」

と、獄中から、三度數願書を出したが、許されなかつた。

間もなく、母の死報に接すると、彼は、日夜、泣き暮した。

後年、榎本は、高位高官に登つても、下婢車夫等が病氣をすれば、自ら行つて見舞つてやる

といふ情の人であつた。

外交官として活躍

榎本の處罰に就ては、朝廷で種々の意見があつた。

長州側の人々は嚴罰にせよといひ、薩摩側は寛大なれと言つて、議論が決せず、刑の決定も遅れた。

その間、對戰中榎本の人物を知つた黒田清隆は、大いに、彼を辯護して、遂に、當路者を動かした。

かくて、榎本は、明治五年正月六日、赦免を仰付けられ、更に十二日には、黒田の盡力により、開拓使御用掛を申付けられた。

當時、黒田は、開拓使長官の職にあつたので、榎本は、罪を赦された身體で、その下で働くことになつたのである。

黒田の恩義に感じた榎本は、大いに働いて、北海道開拓に力を盡した。

明治七年には、海軍中將に任ぜられ、同時に特命全權公使を兼ねて、直ちにロシア在勤を仰付けられた。

その時の榎本の功績は明治七年三月の千島・樺太の交換條約締結の成功である。

更に、彼は、ロシアが朝鮮の元山津を租借して、此所に軍港を築く計畫があるのを知り直ち

に政府に報告して、之を不成功に終らしめた。

そこで、ロシアは、止むなく、ウラヂオに軍港を築いたのである。若し、ロシアの初めの計畫が成功してゐたならば、日露戦争の時には、我國の大脅威となつてゐたであらう。

歸國後、榎本は、十三年から一ヶ年海軍卿に任じ、更に各種の顯官に歴任して、十八年伊藤博文の内閣に遞信大臣に任ぜられたのを初めとして、農商務大臣、文部大臣となつた。

二十四年、ロシア皇太子ニコライ二世が來朝せられた時、大津に於て、津田三藏が皇太子を傷つけた所謂大津事件が突發するや、榎本は、擧げられて、外務大臣となり、困難な外交關係の折衝に當つた。

二十五年樞密顧問官に任ぜられ、更に二十七年農商務大臣になつたのを官歴の最後として、

晩年は、各協會の名譽會長などをして、悠々自適、その餘生を送つた。

明治四十一年十月二十六日歿、年七十三。

川村と中牟田

川村純義

明治の初め我陸軍と海軍の軍政は一に統一されてゐた。

それが、陸軍省・海軍省に分れたのは、明治五年三月である。

勝安房が初代の海軍卿となり、初めて海軍専管の軍政長官が出来たのである。

勝に次いで海軍卿となつたのは川村純義である。次は、榎本武揚、次は、又、川村純義である。

川村純義は、鹿兒島藩士川村與十郎の長男として、天保七年十一月十一日に生れた。

その頃から、我國は内外多事で、幕府は崩壊に瀕し、勤王の志士は起り、外國は我海邊を窺

ふた。

鹿兒島藩では、聽て來る可き日に備へて、勤王精神を養ひ、盛んに武技を鍊つてゐた。

斯る時代に成長した川村は、安政二年、幕府が長崎に設けた海軍傳習所へ、五代才助(友厚)と共に、鹿兒島藩の選拔生として入つた。

其處で、川村は、勝安房、榎本武揚、中牟田倉之助等の後の日本海軍建設の功勞者と知り合つた。

後、明治戊辰の役には、官軍として各地に轉戦したが、特に、會津若松城陥落には大いに功績があつた。

明治二年十一月、川村は兵部大丞に任ぜられて、海軍の軍政に參畫した。

當時、我國が海軍國として世界列強に伍するに、先づ第一の急務は、有能な海軍軍人の養成にあるとして、海軍練習所を築地に設置し、今迄のオランダ式海軍を改めて英國式となし海軍

志願者を推薦せしめたが、明治三年、海軍兵學寮と名を改め、川村純義が兵學頭を兼ねた。

その下には、長崎海軍傳習所の同窓で、佐賀出身の中牟田倉之助がゐて、専ら、經營の任に當つた。

川村は、間もなく、兵學頭を辭して、中牟田がその後を襲つたが、この兵學寮には山本權兵衛、伊集院五郎を始め、日高壯之丞、八田裕次郎、志道貫一など後の日本海軍を背負つて立つた人々が、洋々たる希望を抱いて學んでゐたのである。

この頃、川村は、國歌「君が代」の撰定に、大いに力を竭した。

川村は、四年七月、兵部少輔となり、五年、海軍省が置かれると、海軍卿勝安房の下で、海軍少輔となつて、海軍軍政の實權を掌握した。

次いで、埃國博覽會へ差遣され、歸朝後幾にもなく、海軍中將に任ぜられ、海軍大輔を兼ねた。

この頃、臺灣征伐の議が起り、廟議では略々征討に決してゐたが、川村が極力反對した爲に、一時、沙汰止みとなつた。

西郷隆盛黨の野津鎮雄、同道貫の兄弟は、大いに怒つて、川村を訪ひ、臺灣征討反對の態度を詰つた。

川村は、自分の主張を述べたが、納得されないと見るや、兩人を連れて、西郷の所へ行き、「この兄弟に、純義が臆病論を唱へたから征臺の議が止んだと言はれたのは、貴方ではありませんか。純義、不肖と雖も、海軍の軍政に参畫してゐる者であります。國家の大計より論じて征臺の不可を主張したのであります。臆病の爲ではありません。若し征臺の議が決しられたならば、純義、一兵卒となつて従軍する位の氣概は有つてゐるのであります」と、堂々と述べて、憤慨した。

西郷は、川村より十歳許り年長の郷黨の先輩であつたが、川村に詫びて、野津兄弟を警めた

と云はれる。

西南の役に参戦

その後、西郷隆盛は、征韓論に破れて、郷里鹿兒島に歸つた。

西郷を崇拜する私學黨の青年達は、西郷を擁して、政府に對し問罪の軍を起さんとする様子があつた。

十年二月、熊本鎮臺から、鹿兒島私學黨に愈々不穩の形勢があると告げて來た。

政府は、海軍大輔川村純義を鹿兒島に赴かしめて、其情況を探らした。

川村は、神戸から高雄丸（四八六噸）に乗り、間もなく、鹿兒島沖に着いた。

来て見ると、成程、私學黨の青年達は、噂の通り、海岸一帯に歩哨線を張り、刀や銃を持つて警戒をしてゐるといふ、只ならぬ有様であつた。

而も、彼等の中の篠原國幹、永山彌一郎の二人は、川村が来たのを知ると、相謀つて、川村を拉し、高雄丸を奪はうと企て、二隻の小舟に武装した兵士を乗せて、高雄丸に近附いた。

川村は、これを見て、

「彼等は高雄丸を奪ふ爲に来るのである。彼等を粉碎するのは容易であるが、我より手を出して禍の因を作る事は好まぬ」

と言つて、船長に命じて、錨索を断ち、櫻島の赤水方面へ避けた。

鹿兒島縣令大山綱良は、高雄丸に来て、桐野利秋、篠原國幹が川村と西郷との面談を望んでゐる旨を告げた。

然し、川村は、

「西郷殿と會ふのもよからう、然し余が、西郷殿と會ふ爲に上陸すれば、船中の士卒は皆、余の身邊を危んで従いて来るであらう。また、西郷殿が船に來られるならば、私學黨の青年達が従いて來るだらう。それでは、必ず、問題が起り、面白くない結果になるだらうから、結局、會はない方がよからう」

と、言つて、川村は、遂に、西郷と會はずに歸つた。

この時、如何なる事情があつたにせよ、川村が、何故、一身を投げ出して、西郷に會はなかつたか、會つてゐたならば、西南の役の事情は、幾分、違つてゐたのではないかと残念に思はれるのである。

川村が歸るや、その報告に基づいて、政府は、直ちに、西郷討伐の軍を起したのであつた。

川村は、征討參軍を命ぜられ、海軍の總指揮に當つた。

この時、參戰した官軍の艦船は十九隻で、人員は二千二百八十名であつた。

川村は、名艦船の夫々の持場を決めて、薩肥豊日の海岸線を封鎖し、薩軍の海上からの通航を断つてしまつた。

また、八代に上陸して熊本城と征討軍との連絡を早くし、その結果、薩軍が退却すると、川村は、陸上に官軍を援けて、軍艦筑波から砲撃させ、更に、日進、春日の大砲を陸上げして、薩軍を攻撃した。

連戦連敗の薩軍は、城山に立て籠ると、河野圭一郎、山野田一輔の兩人を軍使として送り、西郷の助命を請ふた。

川村は、九月二十三日の朝、磯の造船所の二階、南に海の見える窓がある部屋で、二人を引見した。

川村は、兩人の懇願を聞いた後、口を開いて、

「足下等の言ふ事件の原因となつた、西郷殿を殺す刺客が来たといふ問題が、若し、事實なら

ば、其相手が内務卿であらうと、大警視であらうと構ふことはない告訴すればよいのである。

その道に依らずして、兵を擧げて問罪の軍を起したのは、道を誤つてゐる。如何に西郷殿が陸軍大將でも、擅に兵亂を醸すは、國憲を紊すものである。今となつては西郷殿の執る可き道は、三つある。一は、潔く自刃して、罪を天下に謝し、士卒に恩命を仰ぐこと、一は投降して、公明なる處断を待つこと、一は陣頭に立つて、同志と共に斃れて武門の意地を貫くことである。足下等は、城山に還つて、余の言つた通り、西郷殿に告げるがよい。其上で、西郷殿が余に言はれることがあるならば、直ちに、余の陣に來られるがよい。然し、戦機は、既に切迫してゐる。今日の午後五時迄に、何分の返答がなければ、官軍は、總攻撃を開始するから、その點を承知してゐて貰ひ度い」

と、言つて、川村は、暫く、瞑目してゐたが、今度は、前と打つて變つた、しんみりとした口調で、

「以上は、川村、參軍としての言葉であるが、希くば川村の私情を西郷殿に傳へて貰ひ度いと、言ひ出した。」

「余を初め、西郷殿の薫陶恩顧を享けた者は、朝野に數十名ある。而も、幸に、皆、相當の地位を保つてゐる。同志相謀つて、西郷殿の家眷に對しては、誓つて厚遇の道を盡し、必ず保護の任に當る。御令息菊次郎君は、延岡の戦ひに負傷され、從僕と共に捕虜となられたが官軍の病院に收容され、漸次快方に向ひつゝあるから、少しも心配されることはない。後事は、毫も顧慮される要はないと、傳へられたい」

言つてから、川村は、二人と晝餐を共にして、四方山の話をした。

それが済むと、河野を留めて、山野田一人を城山へ歸した。

その時、山縣有朋參軍も、一書を西郷に送つて、友情を披瀝した。

山野田が官軍の軍門を出たのは、午後二時であつた。

それから、山縣も、川村も、西郷からの何らかの返事を待つてゐたが、遂に、約束の五時になつても來なかつた。

官軍の總攻撃は開始され、西郷は、遂に、城山の露と消えたのであつた。

榮 達

西南の役後、川村は、軍功により、勳一等に叙せられ、旭日大綬章を賜つた。

次いで、議定官に任ぜられ、翌十一年五月參議、海軍卿となつた。

幾何もなく、横須賀造船所に於て建造した軍艦清輝（八九七トン）をして、歐洲に回航させて邦人の技術を海外に發揚し、且、兵學寮の卒業生中より、川島虎次郎、片岡七郎、山本權兵

衛、遠藤喜太郎、舟木鍊太郎、世良田亮、瓜生外吉などを、ドイツ、イギリス、アメリカへ、留學させた。

その頃、前に英國に注文してあつた初代扶桑、金剛、比叡の三艦が竣成回航されて来て我國海軍も、稍々、態を備へて来た。

十三年二月、川村は海軍卿を辭し、榎本武揚が代つたが、二年有餘にして、再び、川村が海軍卿となつた。

川村が二度目の海軍卿となつた時、大輔として中牟田倉之助を、少輔として眞木長義を招致して、それ迄、薩長で固めた省内の權勢を初めて佐賀人に割與した。

十五年軍備擴張の大詔、發せられるや、川村は、肝膽を砕いて種々畫策し、十六年度以後八ヶ年を期して、毎年三百萬圓宛の製艦費を支出し、四十八隻の艦艇を建造する計畫を樹て、實行の緒についた。

また、十七年には、東海鎮守府を横須賀に移して、横須賀鎮守府と改稱し、次いで、安藝の吳、肥前の佐世保にも鎮守府設置の議を定めた。これ等の土地決定には、その他地にした方がいゝなどといふ意見もあつたが、川村は、敢て、この三地にしたのであつた。

その鑑識の誤らなかつたことは、日清、日露以後の戦役で、明らかに證明された。その後、宮中顧問官及び樞密顧問官に歴任し、三十二年後備役を命ぜられ、三十七年八月十

二日に薨去した。時に年六十九。

中牟田倉之助

中牟田倉之助は、天保八年三月三十四日、佐賀の城下木原村に生れた。

父は同藩士金丸文雄、母は同藩士中牟田武貞の姉石子である。

倉之助は幼名を金吾と言ひ、五男二女の兄妹の内の次男であつた。叔父中牟田武定の養子となり、嘉永元年、武貞の死後跡式相續して、中牟田倉之助と改め、武臣と稱した。

その時、彼は十二歳であつたので實家で兄妹と一緒に暮した。

家は貧しい上に子供が澤山あつたので、父は、家で、寺小屋を開いてゐた。

倉之助は、八歳の時、藩の小學蒙養舎に入つた。

その頃の倉之助の日記を見ると、彼は、拂曉には、柔術、劍術の寒稽古、午迄は蒙養舎に通學、午後は自宅の寺小屋で手習ひ、その間に子守、家事の手傳ひをしながら、復習、豫習をその傍ら、他の少年達と、水泳、石合戦などをしてゐたとある。

蒙養舎に在學すること九年、進んで弘道館に入つた。

藩學弘道館では、武術の外に、朱子學と佐賀論語と迄言はれた「葉隠」主義を鼓吹してゐた。

然し「葉隠」なるものは、熱烈なる忠孝節義を説くが、それは飽く迄も藩主鍋島氏を中軸としてのものであつて「釋迦も、孔子も、楠木も、信玄も、終に龍造寺、鍋島に被官かけられ候事之無く候へば、當家の風には叶ひ申さず候云々」といふ風なものであつたので、倉之助は、この思想を固陋狹隘として、終に「葉隠」の一卷をだに讀まなかつたといふ。倉之助の氣概の一端を知る事が出来やう。

「葉隠」は讀まなかつたといへ、倉之助の學術優等、特に數學に秀でゝゐることは認められて選拔されて、上級生若干名と共に、當時、創立されたばかりの蘭學寮に移された。

明治の功臣、副島種臣、大木喬任、大隈重信、江藤新平等は、蘭學寮では、倉之助の後輩である。

學ぶこと一年にして、倉之助は、藩命に依り十五名の學友と共に長崎海軍傳習所に入つた。此處で、倉之助は、勝安房、榎本武揚、五代才助、松岡磐吉、更に、この後、仕事を共にし

た川村純義を知つた。

幾何もなく學窓を出ると、倉之助は、佐賀の三重津海軍學寮の教官となつて、専ら、航海術を教へた。

上海渡航

文久二年春、幕府は、海外貿易の實情を體驗せんが爲に、官船千歲丸（三八五噸）に日本貨物を積込み、日本水夫を乗せて、初めて上海に渡航させた。

貿易を目的に、正式に大船を海外へ遣ることは、寛永鎖國以後二百餘年來の壯舉であつた。倉之助も請ふて、乗船させて貰つた。

この上海渡航中、倉之助が最も親密にしたのは、薩摩の五代才助と長州の高杉晋作とであつた。

殊に、慷慨一世を睥睨する奇傑高杉晋作は、倉之助と肝膽相照し互に相推服した。この時、高杉は二十四歳、中牟田は二十六歳の働き盛りの青年であつた。

高杉はこの時の日記「遊清五録」に於て、隨所に中牟田の人物を褒め「中牟田は航海術に練達し英語を解す」と特筆してゐる。また「同僚甚だ不平なり、唯、中牟田男士あり。余之が爲に大いに力を得たり」とも書いてゐる。以て、中牟田の人物の程度を知ることが出来る。

千歲丸は五島沖を通過してから猛烈な颱風に遭ひ、やつと、沈没を免れて、長崎を出て八日目に上海に着いた。

上海の繁華を見て、中牟田も高杉も茫然となつたのであつた。

上海滞在中は、炎熱と疫病の流行で、船員中にも續々と死ぬ者が出來たが、中牟田は、勤勉

にあちこち歩いて、多くの外人達に會つたり、海圖、地圖、史談その他の書物を買ひ込んだ。而も、彼等が、上海に着いた翌日、未明から、陸上で銃砲聲が頻りに聞えた。

これは、洪秀全の率ゐる長髮賊が上海に迫つた爲であつた。

上海の街は、英佛二國の軍隊が守備して、支那人と雖も、自由に出入が出来なかつた。

中牟田は「餘り西洋人之勢盛なること、唐人の爲に憐む可し。支那の衰微、押して知る可き候也」と書き、高杉は「實に上海の地は支那に屬すと雖も、英佛の屬地と謂ふもまた可也」「我邦人と雖も、心を須るすして可ならんや。支那の事に非ざる也」と喝破してゐる。支那の殖民地化を先憂してゐるのだ。

一行の上海滞在中、本國日本の幕末の慌しい風雲が虚實共に傳へられて來た。

そこで、一行は、豫定を繰上げて、七月五日發航、同十五日長崎に歸着した。

歸朝後、高杉は、直ちに長藩を率ゐて、維新回天の事業に東奔西走した。

中牟田は、數ヶ月故郷に病を獲てゐたが、三重津海軍學寮に再び出勤して、佐賀海軍の爲に盡瘁した。

函館戦争に参戦

明治元年、鳥羽伏見の戦の後、關東御親征の時、佐賀縣の軍艦を徴された。當時、佐賀藩は諸藩中隨一の海軍國であつた。

中牟田は孟春艦長となり東上した。

四月、江戸城は無事明渡されたが、幕府の軍艦は、約に反いて官軍に渡されず、榎本武揚に率ゐられて、館山灣に逃げた。

某日、中牟田は、品川で、勝安房に會ひ、徳川方の無統制を責めた。勝も榎本も、長崎海軍傳習所時代の中牟田の先輩若しくは同輩であつた。勝は、中牟田に、

「必ず榎本を呼び返す」と、誓つた。

幾何もなく、勝の奔走で榎本は歸つて来て、幕艦の半数を官軍に渡した。中牟田は、その内の翔鶴丸の船長を命ぜられた。

中牟田が翔鶴丸を受取つて試運轉をしてゐる時、榎本はやつて来て、之を見てゐたが、莞爾として、

「流石は貴方です。早く運轉が出来ましたね」と言つた。

そのほかの長崎海軍傳習所の學友は、相見て笑つたのだつた。

然し、間もなく、この二人が、敵となり、砲火の間に相見え、命を堵して戦はなければならなかつた。

奥羽の列藩は、江戸城明渡しの後も朝命に服さなかつたので官軍は北上した。

中牟田も愛乗の孟春丸に乗り各地に轉戦して功勞をたてた。

そのうち、榎本武揚が函館に走ると、中牟田は、榎本追討の命を受けた。

北上した中牟田は、各所で、榎本軍を砲撃して敗走させたが、最も激烈だつたのは、五月十

一日の函館灣の戦であつた。

この日、既に壊滅に類した榎本軍に最後の止めを刺す可く、中牟田の率ゐる官軍の艦隊は、大膽に、函館灣に乗り込んだのであつた。中牟田は、朝陽丸に乗組んで勇戦したが、殊に、敵艦蟠龍とは猛烈に戦つた。

皮肉にも、蟠龍の艦長は長崎傳習所の學友松岡磐吉であつた。

砲火を交へるうち、蟠龍の打ち出した砲弾が、見事に、朝陽の火薬庫に命中、朝陽は轟然と爆發した。

その時、艦橋にゐた中牟田は、刎ね飛ばされて、甲板に落らた。同時に、船は舳の方より沈下して、潮が甲板を洗ひ始めた。中牟田は火薬の爲、顔面を焼かれて眼が開けられず、失明したものだと思つたが、自若として、艦の方に向つて泳いで帆柱に掴まつたが、船は、刻々と沈んで行く。

その時、源助といふ水夫が、中牟田を見付けて泳いで来て、

「閣下、敵艦が近づいて来ますが、どうしませうか」

と大聲で訊ねた。中牟田は、

「銃を放て」と叱咤した。

「銃はありません」と源助が答へると、中牟田は毫も慌てず、

「敵の咽喉に嚙みついて死ぬ」と言つたといふ。

間もなく、中牟田は、觀戰の英艦の救助艇に救はれた。

中牟田は、傷癒えて、六月東京に歸着した。
中牟田は總督參謀より殊勳を賞せられたのみならず、六月十日明治天皇より有難いお賞めのお言葉を賜り御酒を賜つた。

海軍建設に盡力

明治三年創設された海軍兵學寮の兵學頭に川村純義がなると、中牟田は、その下で、専ら、經營に當つた。

幾何もなく、川村が去ると、中牟田は、その後を追つて兵學頭となり、四年間、海軍の俊才の教育、兵學寮の擴張、分校の設立などに力を盡した。

六年埃國博覽會に派遣され、三月月近くウイーンに滞留した後、歐洲各國を巡り、海軍の事情を視察した。その間も、矢張り、外遊中の海軍少輔川村純義と断えず連絡を取つた。

歸朝後、十年春、西南の役に川村海軍大輔が戦地に赴くや、中牟田は、中央にゐて、川村と電報、書狀の遣り取りをして連絡し早朝より徹夜職務に執掌した。

十三年東海鎮守府司令長官に補せられ、これが十七年に至つて横須賀に移るや、横須賀鎮守府長官となつた。

二十二年三月東京灣口の第一回海軍大演習並びに二十五年三月の第二回海軍大演習は、帝國海軍創設以來の大壯舉であつた。

中牟田は、この時、二度共、總指揮官、審判官長として臨んだ。

演習後、中牟田の講評は、精嚴を極め、艦隊行動の缺點を指示咎責して、殆んど完膚なからしめた。之は、函館の實戰の經驗に依るものといはれる。

更に、吳鎮守府長官、海軍大學長、海軍軍令部長に歴任して、中將で軍職を退き、樞密院に入つた。

日清戰役當時、中牟田は、樞密顧問官として、直接實戰には参加しなかつたが、當時の大國清を敵として、遂に、あれ程の大勝利を得たのは、彼の努力に依て固められた海軍力の賜だと言はれる。

中牟田中將は、大正五年三月三十日、八十二歳の長壽を全うして薨去した。

樺山資紀

寫眞で見る樺山資紀は、どれも伏見勝ちで、五分刈りの髪が苔のやうに延びて、村夫子然として、風采甚た上らない。

どう見ても、素朴舊弊な片田舎の小學校長位にしか思はれない。

が、實際の樺山は、剛毅果斷を以て海軍部内に鳴り、山本權兵衛と並び稱される人望があつた。

樺山を有名にしたのは、所謂「樺山の三公憤」に依るのである。

樺山の三公憤とは、

- 一、西南の役、西郷隆盛の擧兵に、熊本鎮臺參謀長として公憤を發したること
- 二、第二議會に於て、海防演説をした時、反對にあひ、海軍大臣として公憤を發したること
- 三、日清戦争に於ける黄海の海戦の時、聯合艦隊の作戦に關して、海軍軍令部長として公憤を發したること

以上三つである。

而も、これ等は、奇妙にも樺山の一生を三段に分つて、それぞれ活躍の動機となつてゐる。

即ち、第一は樺山が陸軍軍人として戦闘に参加した際であり、第二は政治家として臺閣に列した時であり、第三は海軍軍人として作戦に當つた時のことである。

「三公憤」の當否は兎も角として、夫々純乎たる武人としての樺山の面目を發揮したものである。

青年時代

樺山資紀は、天保八年十一月鹿兒島藩士橋口與三郎の三男として生れ、幼名を覺之進と呼ん

だ。文久三年、樺山四郎右衛門の養嗣子となり、樺山姓を名乗つた。

次兄傳藏は、文久二年、伏見寺田屋の變に同志有馬新七等と共に斃れた勤王の志士である。

次弟與助は、明治戊辰、錦旗の東征に従ひ、野州梁田に奮戦して斃れた。

資紀が名を擧げた最初の機會は、文久三年七月の「薩英戦争」である。

これは、有名な生麥事件の下手人の處罰と被害者遺族の扶助料一萬ポンドを要求して、英艦七隻が鹿兒島灣頭に現れ、砲撃を開始した爲に起つた戦争だ。

薩藩では、上下擧つて、之を迎へ撃ち、大いに勇戦奮闘した。

時に、資紀は二十七歳、遊軍として辨天砲臺を守備してゐた。

初め、薩軍は英艦の新式の火器に壓倒されてゐたが、資紀等は勇戦して、砲戦すること二日、遂に英艦を敗走させたのである。

この時以來、資紀は、大いに、その勇名を馳せた。

慶應三年、樺山が二番遊遊隊に屬して京都御守衛に當つてゐる時、長州に落ち延びた七卿の中うちの三條實美等が上洛の目的を持つて大阪迄來た。

然し、當時、將軍徳川慶喜は京都を出て大阪城にゐたが、之に隨ふ幕兵及び會桑二藩の兵が頻りに蠢動し、京攝の間は、物情恟々として、危険の上もなかつたので、三條卿等は、上洛することが出来なかつた。

この時、薩藩では、沈着剛膽な樺山を差向けて、三條卿等を護衛せしめ、事なく入京せしめたのであつた。

更に、明治元年正月二日、鳥羽の戦起るや、樺山は幕軍の計畫の裏をかき、丹波路から晝夜兼行で入京せんとする幕兵を、淀の堤に迎撃して敗走せしめた。

次いで、奥羽征討軍に加はり、東山道より轉戦して、奥州白河口で大いに奮戦した。

白河口は、奥羽聯合軍にとつては重要な地なので、守備を固くして抵抗した爲、非常な激戦

であつた。

この時、樺山は、斥候の任を帯びて敵地に侵入したが、運悪く三十人の部下と共に敵の重圍に陥り、忽ち十七名を失つた。

勢を得た敵は、樺山等を殲滅しようとして盛んに射撃して來た。

樺山は、残りの兵を集めると、豪膽にも、突撃を行ひ、一方の血路を拓いて本營に歸つた。白河口城が陥るや、樺山がその守備に當つた。

敵は、二回に渡つて、城を奪還せんものと、逆襲して來たが樺山はよく守つて之を退けた。

臺灣征伐と熊本籠城

樺山は、明治四年、陸軍に出仕して、大隊長となり、陸軍少佐に任じ、鎮西鎮臺鹿兒島分營長に補せられた。

この時、征臺の議起るや、樺山は、その即時實行を主張した。

然るに、中央の議論も可否の二つに分れてゐると聞くと、樺山は、憤激して、鹿兒島より上京して、陸軍大將西郷隆盛、陸軍大輔山縣有朋等要路の大官を歴訪して、即時臺灣征伐實行を説いた。

西郷まづ樺山の意見に賛成し副島外務卿、板垣參議も賛成した。

然し、事情があつて、臺灣征伐は、即時には行はれなかつた。

然し、樺山はそのため、認められて、六年には副島全權公使に隨行して清國を視察し、臺灣を探索した。

七年、谷干城が兵を率ゐて臺灣征伐に来るや、樺山は勇躍して之に加はり各地に轉戦した。

此の戦では樺山は恩威を施し生蕃に非常に尊敬された。

彼は、談判に来る生蕃があれば、少しも警戒することなく、酒を與へて、胸襟を開いて語つたので、非常に心服された。

また、生捕りにした生蕃の少女を、東京へ送り、勉學させたといふエピソードもある。

樺山は、臺灣討伐中、マラリヤに罹つて病院に入つたが、醫者より絶對安靜を申渡されるや一ヶ月の間ベッドに寝た儘、絶對に動かなかつたといふ。律義な樺山の性格を知ることが出来る。

總て、八年には陸軍第二局長となり、江華島事件の時には、黒田全權大使に隨行して朝鮮に行つた。九年熊本鎮臺幕僚參謀長兼熊本衛戍司令官を拜命した。翌十年二月、西南の役起るや樺山等の立籠つた熊本城は、薩軍に包圍されたのである。

はじめ、西郷隆盛は、愈々舉兵と決るや、熊本鎮臺司令官谷干城宛に書翰を送つた。

谷に代つて参謀長の樺山が、その使者に引見した。

手紙は、言はゞ、降服勸告状であつた。

それを見て、樺山は、使者に、

「如何なる理由があるにせよ、國憲を紊す舉兵には飽く迄反對である。薩軍が熊本城下に來れば、斷乎撃退するのみである」

と言つて歸した。

西郷は、樺山にとつては、屢々教へを受け、知遇を得た郷黨の先輩である。西郷と共に起つた薩軍の中には、樺山の先輩、知己、朋友も多かつたのであつた。

西郷軍の中では、樺山が味方になるか、さもなければ、中立を守つてくれるだらうと期待してゐた者も多かつた。

然し、樺山は、嚴として、大義に附いたのであつた。

歸つて來た使者の返事を聞いた西郷は、

「司令の谷はともかく、参謀に樺山がゐるは、熊本城は陥ちぬかもしれぬ」と言つたさうである。

以て樺山の戦將としての偉さを伺ふことが出來やう。

この時の薩軍は、勇猛で鳴る薩摩軍人であつたのに反して、熊本鎮臺の兵士は、徵兵制により、百姓町人から募られた者ばかりであつたので、官軍は非常な苦戦に陥つた。

然し、樺山は、却つて、最新編製の軍隊の力を見せるのはこの時であると、部下を指揮して奮戦したのである。

優勢な薩軍に攻められて、官軍は、遂に熊本に籠城した。

或時、城中で將校等が會議してゐると、花岡山の陣地から打ち出した薩軍の砲彈が會議所の頂上の檜に命中して、大音響とともに破裂した。一座の者は、悉く、驚愕して色を失つた

のに、樺山だけは、泰然として、平素と變りなかつたといふ。

彼は、この戦争で、二度負傷したが、創を包んで戰場に立ち、ベッドに横たはらなかつた。

籠城三十日に及ぶや、城中の兵糧、彈藥が缺乏した。

樺山は、自ら、友軍と連絡を取る爲、薩軍の包圍陣を突破する突圍隊を率ゐて出ると主張し

たが、彼に代る參謀長が無いので、その役は、奥保鞆に譲つた。

奥は、勇敢に、この使命を遂行して、友軍の一部を熊本城に入れるのに成功した。その結果

薩軍の敗退となつたのである。

樺山は、すつと後、白鳥庫吉文學博士に熊本籠城の時の心境を訊かれるや、

「自分も西郷さんには、勿論、心服してゐたので、それだけに一層奮勵したやうな譯ぢや。何

んだか西郷さんに試験されてゐるやうな氣がしてな……。不行届であつたら、それこそ落第で

あの眼でウンと叱られるぢやらう。然し、それと反對に、堪へ切つたとしたら、能くやりをつ

たと褒められるに相違ない——と、まアかういふ考へでな、いつも西郷さんを眼の前にをいて
勵んだぢや」

と、言つてゐる。

第二議會の蠻勇演説

樺山は、西南の役後、大佐に昇り、近衛の參謀長となつたが、十三年には大警視を兼ねた。

翌年、大警視は警視總監と改稱された。

十五年、陸海軍軍備擴張の大詔煥發されるや、樺山は、中牟田倉之助海軍大輔に代り、警視
總監より入つて、その職を繼いだ。次いで、海軍少將に轉じ、一度も軍艦に乗らずして、海軍

提督となつたのである。

樺山は、西郷従道が陸軍中將より傳じて、初代の海軍大臣となるや、その下で、我國海軍の建設に大いに努力した。

彼は、川村海軍卿の計畫の後をつぎ、新に艦艇建造の案を立て、千代田、秋津洲、吉野等の新威力を加へ、又、陸軍の參謀本部に相當する軍令部を創設した。

總て、中將に進み、十九年には軍務局長、次いで海軍次官となつたが、二十三年五月、山縣内閣の海軍大臣西郷従道が内務大臣に轉するや、樺山が代つて海軍大臣となつた。樺山は、その年召集された第一帝國議會に臨んで、海軍擴張案を述べ、

「攻守の施制二つながら遺憾なからしめるには、軍艦七十五隻二十萬噸の海軍を要す。差し迫つて今日必要とするのは少くとも十二萬噸二十五隻の新造であるから、政府は今後六七年間にこの計畫を完成しようと思ふ」と言つた。

海軍擴張案は、川村海軍卿の時から、徒らに海軍部に薩閥軍人を多くするのみたといふ理由で、薩閥海軍を嫌ふ政黨から反對されてゐた。

樺山の案も、同じ理由で、遂に否決された。

翌年五月、山縣内閣に次いで松方内閣が成立したが、樺山は、依然、留任した。

その第二議會に於て、彼は、矢張り、第一議會の時の原案を維持して、海軍擴張を主張した。

然し、今度も、前と同じ理由で反對に會ふや、樺山は、熱心の餘り、藩閥擁護演説を行ひ、「世人は薩長政府と稱して政府を攻撃するが、内外の艱難を切り抜けて、今日國家の治安を保ち、四千萬生靈の安寧を致したのは薩長政府の力に依るのではないか」と迄言つた。

議場は忽ち怒罵嘲笑で滿され、騒然として收拾出來なくなつた。

樺山が議長に制せられて演壇を下りるや、改進黨第一の雄辯家島田三郎がその後を駈け登り

海軍擴張の反對を述べると共に、樺山の藩閥擁護の失言を咎めた。

その爲、第二議會は解散となり、改選後の第三議會に於ても、衆議院では依然として軍艦建造費を否決した。

その結果、松方内閣の總辭職となり、第二次伊藤内閣の成立となり、仁禮景範が海軍大臣となつた。

黄海の海戦の殊勳

樺山は、松方内閣が瓦解すると共に辭職して、樞密顧問官に任ぜられた。此時、現役を去り豫備役に入つたのである。

明治二十七年、朝鮮の東學黨の亂に端を發して、日清の國交が一髮の危機に迫つた。

この時、突如、海軍軍令部長中牟田倉之助は樞密顧問官に去り、樺山が、特に現役に復されその後を襲ふた。

此の間の消息はもとより輕々に判斷すべきでないが、中牟田は優勢な清國艦隊に對抗するに朝鮮海峡に退いて守るといふ消極的防衛的作戰方針を採つたのに反し、樺山の我全艦隊をあげて積極的攻撃的に出るといふ作戰方針が、時の西郷海軍大臣の納れるところとなつたからであると言はれてゐる。

かくて軍令部長の任に就くや、樺山は、即日、我艦隊の根據地たる佐世保に行つて、艦隊將士を鼓舞し、聯合艦隊司令長官伊東祐亨を激勵した。

七月二十三日、全艦隊は佐世保を拔錨して支那海へ向つた。

樺山は、高砂丸に乗つて、各艦の出發を港外まで送り橋頭高く、

「帝國海軍の名譽を揚げよ」といふ信號旗を揚げた。
すると、第一遊撃隊司令官坪井航三、之に應えて、

「正に揚ぐ」

聯合艦隊司令長官伊東祐亨は、

「確かに揚ぐ」

西海艦隊司令長官相浦紀道は、

「凱旋を待て」と、各々信號旗を揚げた。

この應答を見て、我艦隊の將士一人残らず肅然として、固く一死報國を誓つたのであつた。
事實、此の時の戦は、維新以來蓄積した我兵力で、未曾有の大砲に當るものであつた。殊に
海國である我國にとつては、海軍の勝敗如何は、皇國の興廢の鍵を握るものであつた。

佐世保を出發した伊東の率ゐる聯合艦隊は、先づ七月二十五日の豊島沖の海戦に大捷を博し

て士氣大いに揚つた。然るに、如何なる理由があつたのか、司令長官の伊東祐亨は、敵艦隊が
黄海に現はれても、我艦隊を根據地に伏せて容易に出動しようとしなかつた。

そこで、樺山は、じつとして居れず、自ら西京丸に乗つて、伊東激勵の爲、我艦隊根據地
行つた。

九月十七日、海洋島附近で、我艦隊と敵艦隊の接戦となり、所謂、黄海の海戦となつた。

この時、樺山は、西京丸に乗つて参戦したのである。

西京丸は巡洋艦代理とはいふものゝ、元來が商船で排水量は二千九百十二噸しかなかつた。

大砲も、十二センチ砲一門、五十七ミリ砲一門、四十七ミリ輕砲一門を備えてゐるのみだつ
た。従つて、初めの間は、戦列を避けてゐたが、激戦となるや、何時の間にかその渦中に入り
敵砲火の集中するところとなつた。

殊に、敵の定遠・鎮遠の二大戦艦（何れも七四三〇噸の甲鐵艦）に追はれて、その打ち出す

十五サンチ或は三十サンチ半の巨弾が機關室といはず、上下甲板と言はず落下して破裂した。一弾は舵機に通じる蒸氣管を破壊したので、氣動舵は用をなさなくなった。又、一弾は信管を破り、舵機室、寢室、倉庫を貫いて火災を起した。更に、又、一弾が来て、西京丸の右舷後音を貫き、浸水し始めた。

西京丸は舵機を破壊されたので方向を轉廻することも出来ず、下からは浸水、甲板は火を吹き乍ら、敵艦隊の真中に向つて走つて行つた。さすがに勇敢な乗組員も、色を失ひ狼狽したが樺山は、平然として、艦橋に立ち、靜かに口を開いて、

「仕方があるまい」と言つた。

その時、蔡廷幹の艇長たる敵水雷艇が、好き獲物とばかりに西京丸に肉迫して来た。

西京丸では、之を撃沈しようと、大砲に彈丸をこめ、引金を引いたが發砲しない。見ると、運悪くも、電流装置が壊れて、電流が通じず、發砲しないのだつた。それと見てか、敵水雷艇

は、ぐんぐん接近して来て、魚雷發射管の方向を定めてゐる。西京丸では只、手を拱めて、それを見るだけだつた。樺山はその時、

「敵を乗り沈めよ！」と怒號したが、さうも行かない。

敵水雷艇が數十米の近くに來て、さつと白い水煙と共に魚雷が水に潜るのを見た。

一瞬の後には、船もろともに爆破され粉々になつて吹き飛ばされるものと、西京丸の將兵は觀念の眼を瞑つた。然るに、一刻、二刻、——一分二分の後にも魚雷は命中しなかつた。

餘りに近くで發射したので、魚雷は西京丸の底を潜つて向ふへ抜けたのだつた。

天祐に感謝しながら、西京丸は、午後四時二十分頃、

「舵機故障あり假根據地に歸る」の信號を掲げて戰場を去つた。

我海軍は、黄海の大捷に次いで、威海衛で敵海隊を全滅させた。世間で、樺山軍令部長を黄海の勇將と讃へた。

蓋し、樺山の剛毅果斷な點が人氣を得たのであらう。
事實、軍令部長の要職にあり乍ら、砲煙彈雨の中を馳驅したのは空前絶後のことであらう。
日清戦役終る頃の俚諺に、

天祐六分に樺山三分、あとの一分が鐵砲玉

などであるのを見ても、樺山の人氣を知ることが出来る。
時の青年將校が集會所で、

「次の總理大臣は樺山閣下だ」

「いや、閣下は政治家にはしたくない。あくまで軍人だ」と論議して、喧嘩になつたといふ有名な話さへある。

樺山は、當時の青年將校崇拜の的でもあつたのだ。

榮 達

日清戦役後、樺山は、海軍大將に任じ、功二級伯爵を賜つた。

二十八年、青年時代から縁故の深い臺灣の初代總督となり、今日の臺灣の治世、教育の基礎確立に力を竭した。

二十九年第二次松方内閣の内務大臣となり、大久保甲東以來の好内相と讃へられた。三十一年、山縣内閣の文部大臣となり、人材を登用し、文政を刷新し、小學校令の改正等を行つた。

三十三年、樞密顧問官となり、三十六年には、元帥府に列せられ、正二位に進んだ。

日露戦争の際には、海軍部内の一部では、樺山元帥の出處を期待したほど、彼の人望はあつ

伊東祐亨

た。

大正二年、教育調査會の總裁となり、大正十一年二月八日、十六歳をもつて薨去した。特旨をもつて従一位に叙せられた。

伊東祐亨は、日清戦争の時には聯合艦隊司令長官、日露戦争に於ては、海軍軍司令部長として、赫々たる武勳を奏した我海軍の功將である。海軍大將に任ぜられた順序は、西郷従道、樺山資紀について第三番目であるが、西郷も樺山も共に陸軍より海軍に轉じたのであつて、眞に海軍に出身して海軍大將となつたのは、伊東を以て嚆矢とする。

落閑的に見れば、伊東は、長の陸軍の山縣有朋に對峙した薩の海軍の長老であつた。世人の言ふ如く薩人の性格を大別して、一は寡黙訥辯、茫洋として捕捉し難い者と、他は辯舌に優れ直截明快才氣煥發する者との二つがあるとするれば、伊東は西郷従道と共に前者の部類に入り、山本權兵衛、柴山矢八は後者の部類に入る。

伊東は、何事に對しても全く、要領悪くあくまでもお人好しであつた。その爲に彼は、少數の人には認められ尊敬されたが、大體に於て非難され、損をしたのである。

青年時代

伊東祐亨は、天保十四年五月十二日、鹿兒島城下の武家屋敷清水町に、薩藩士祐典の第四子として生れた。異母兄及び弟姉妹をあはせて十一人あつた。男は、夫々、陸海軍に出仕して名をあげたが、殊に、祐亨の兄祐磨は、海軍中將子爵にまで出世した。

祐亨は、幼名を金次郎又は四郎右衛門とも言つたが、後改めて四郎といひ更に祐亨とした。少年時代、論語の素讀は寺子屋で、經書は薩藩の少年學校である聖堂で學んだ。然し、彼は學問は得意でなかつたので、相撲・擊劍など武技方面に興味を持つてゐた。伊東は、この頃から總べてに要領悪く、良く言へば大器晩成型であつたと言はれてゐる。

彼は、十四五歳で早くも海軍入りを志願したが、更に彼の決心を固めたのは、當時薩藩の青年層に大覺醒をもたらしたかの「薩英戦争」以來である。

文久三年、生麥事件の後始末として、強硬な要求を提げて英艦七隻が鹿兒島灣頭に雄姿を現はし、薩藩の回答を求めた。薩藩では上下を擧げて憤激し、英艦を打ち攘はうとした。この時二十一歳の青年であつた伊東祐亨は、大山巖、西郷從道、仁禮景範、篠原國幹等と共に決死奇襲隊の一員となつた。彼等は、各々、商人の風を装ふて、野菜を運ぶ船に乗り、英艦に野菜を賣りに來たと稱して、艦上に登るや日本刀を振りかざして縦横に暴れ英艦を拿捕しようといふ計畫したのであつた。

彼等は、先づ、特に藩侯に面謁を許され、最後のお別れをしてから、傳馬舟に西瓜を積んで英艦に漕ぎつけた。伊東も亦その中にあつて、一尺八寸の殿中差を西瓜の下に隠してゐた。英艦の下に來ると彼等は、大西瓜を差し上げて、

「西瓜を持つて来たから、艦に揚げてくれ」と手真似した。然し英艦の方では、傳馬舟の中の青年達の兇悪な氣勢を見て、

「ノー、ノー」と、頻りに手を振つて断はつた。伊東等が幾ら頼んでも艦上に揚げてくれないのだ。

一方、伊東等は、陸で見えてゐた時よりも傍へ来て見た英艦の巨大な姿に、今更の如く眼を刮り氣を吞まれ、艦上に登る事も出来ず、初めの意氣込みに反して、悄然として歸つて来たのであつた。

英艦斬り込みは斯くの如く失敗したが、その後の薩藩と英艦の戦闘は可成り目覺しいものがあつた。然し、結局、遂に薩藩が英の要求を入れたのであつた。この時以來、薩藩の青年達は海防の一日も忽に出来ない事を悟り、海軍に志す者が多數輩出したのである。

その後、伊東は藩の英學校たる開成所に入り、修業が終ると勝海舟の兵庫海軍塾に入り、専

念航海術を學んだ。兵庫海軍塾では、坂本龍馬が塾長であつて、伊東は陸奥宗光と共に、西南の俊才として異彩を放つた。伊東が後年我海軍の爲に活躍した技術的・人間的の素地は、概ね、この塾で培はれたのである。その頃、京都の藩邸で催された相撲大會で、伊東は、相撲上手を以て自他共に相許す西郷隆盛を、はたき込みの一手で四ん這ひにさせて、喝采を博したといふ。

幾何もなく、勝安房は幕府の嫌疑を蒙り、塾は解散された。時に、幕府は崩潰に瀕し、勤王の志士輩出して、天下の大勢は變轉の兆を示してゐた。伊東も、この形勢に動かされて、朋友先輩達の例に倣ひ、脱藩して江戸に走つた。江戸に上るや、彼は、當時の砲術家江川太郎左衛門の塾に入り、砲術を修める傍ら、廣く天下の志士と交り、尊王攘夷を説き、四方に奔走した。その爲、彼は幕吏に追求されて、各所に逃げ廻る身となつた。

一日、品川で遊び、熟睡中を數人の捕吏に踏み込まれて、危く捕まらうとしたが、刀を振つ

て、辛うじて逃れることが出来た。

その噂が鹿兒島へ聞えると、家兄達は累を藩に及ぼすことを恐れて、藩主に請うて、祐亨逮捕の允しをうけた。家兄は江戸へ上り、百方祐亨の所在を搜索したが、其踪跡を得ることが出来なかつたといふ。

慶應三年、祐亨は思ふところあつて、佐土原藩邸に身を潜めて謹慎し、密かに藩廳の重役へ書を送り歸藩を願つた。重役は、祐亨の才を惜しみ、請を入れて、歸藩を許した。

伊東は、十二日二十五日、藩の汽船胡蝶丸（一四六トン）が品川灣を解纜するので、それに乗つて歸る豫定だつた。然るに、その日の未明、豫て薩藩を敵視してゐた幕府の命により莊内その他の藩兵が大舉して薩邸及び佐土原邸を圍み焼打ちをした。伊東は、包圍された中をわづかに身を以て逃げ出し、芝浦から傳馬舟に乗つて、沖の胡蝶丸に漕ぎつけた。

薩藩邸を逃れた同藩士六十餘名も胡蝶丸に逃げて來た。すると近くに碇泊してゐた幕府の軍

艦回天（七一〇トン）・蟠龍の二艦が胡蝶丸めがけて砲撃して來た。恰度その時、運悪く、胡蝶丸の船長は上陸してゐて船にゐなかつた。人々は、船まで逃れて來たものゝ、出帆も出來ずこの儘、幕艦の射撃目標となり撃沈されてしまふのかと悲しんだ。

時に、伊東は、豫て修得した航海術と砲術を試すのはこの時だとばかりに、船員をはじめ藩士達を指揮して錨を上げた。それと見て、神奈川沖まで追つて來た幕艦に應じて、伊東は自ら砲手となり胡蝶丸の砲門を開いた。然し、胡蝶丸と回天・蟠龍二艦とは艦の構造、大小、能力に於て格段の差異があつた。胡蝶丸は全力を竭して奮戦したが所詮幕艦の敵でなく彈丸もつき果て、追ひつめられた。伊東は、

「坐して空しく敵彈に斃れるよりも、激突を試みて死なう」と決心して、再三、幕艦に衝突を試みた。然し、幕艦は、その度に之を避けて、盛んに猛射して來た。胡蝶丸の船體には、忽ち六十餘孔の彈痕が出來て、蜂の巢のやうになつた。

伊東は、遂に、最後の決心をして、人々を督令して全速力で西へ走り、漸く、幕艦の追跡を逃れて、翌年一月二日、兵庫湊に着くことが出来たのであった。

帝國海軍出仕

明治維新成り王政復古するや、伊東は、帝國海軍に入り、要務の諸官に歴任して大いに竭すところがあつた。

明治七年の佐賀の亂には、東艦長として福岡長崎を警戒し、九年には日進艦長として黒田清隆、井上馨が全權使節として、朝鮮に行くのを護衛し、十年の西南の役には龍驤の艦長として博多から南海附近に活躍した。その後、或は海外に航し、或は遠洋航海に出て困苦と尊い經

験を得て歸つた。

又、十八年五月二十六日には、英國アームストロング會社で建造中の浪速を受取る爲に横濱を出帆、アメリカを経てイギリスに渡つた。浪速の竣工する迄、伊東は、英佛獨逸の各地を廻つて各國の軍備狀況を調査した。浪速竣工するや、伊東は、その回航委員長として乗込み、山本權兵衛少佐以下の士官乗組員を指揮して、我國に回航して來た。それ迄、外國で建造された軍艦は總て外人の手で回航されて來てゐたので、日本人に依つて歐洲の果から極東まで運轉されて來たのはこれが初めてである。

歸朝後も伊東は、更に昇進を重ねて、海軍省第一局長、海軍大學校長を経て二十五年に海軍中將に任じ、二十六年、常備艦隊司令長官となつた。

伊東は、斯様に昇進したが、言論に至つては相變らず拙で、自分の意中を巧みに表現することが出来なかつた。海軍將校會議等に臨んでも、いつも、意餘つて辭足らず、度々、他の人

に論破されて、自分の意向を徹することが出来なかつた。或日、會議が終つて家へ歸るや、酒を鯨飲して、

「今日も亦やり込められたわい。せめて、俺の一生涯に大海戦でもあれば、俺の偉さを見せてやれるのだが、それ迄は議論の世間で駄目だ」と言つて、大聲で笑つたといふ。

ところが、果然、日清戦役が起り、彼の眞價を問はれる時が來たのであつた。

黄海の海戦

明治二十七八年の日清戦役は、我國にとつては、維新以來蓄積して來た兵力で未曾有の大敵に當るものであつた。新興日本の興廢の岐れ目であつた。

當時、我陸軍は殆んど完成の境に達してゐたが、海軍は技術の上では清國に秀れてゐたが、軍艦に於て遙に劣つてゐた。我海軍は、軍艦三十一隻・水雷艇二十六隻總噸數約六萬噸であつたのに反し、清國海軍は、北洋・南洋・福建・廣東の四艦隊を合すると、軍艦六十三隻・水雷艇二十四隻總噸數約八萬四千噸であつた。その主力艦を比べると、清國の定遠・鎮遠の二大甲鐵艦は七四三〇噸であるのに、我嚴島・松島・橋立は約四三〇〇噸であつた。

この日清の海軍が相戦ふ場合の勝敗は、清國のみならず、他の諸外國も清國に歩があると思つてゐたのだつた。若し、それが事實となつて、清國に制海權を握られるならば、島國である我國は陸兵を彼の地に送ることは出來ず、敵兵の我領土内に上陸するのを待つて戦はなければならぬのであつた。この時に、伊東は聯合艦隊司令長官となつて、我鐵艦を率ゐて清國艦隊撃滅に向つたのである。

我鐵艦は、先づ七月二十五日の豊島沖の海戦に大捷を博して、士氣大いに揚つた。然るに、

慎重なる伊東は、進んで敵艦を追つて決戦を挑む策を採らず、我艦隊を根據地に伏せて、敵艦の近付くのを待つて攻撃せんとする戦法を取つた。ところが、剛毅果斷な軍令部長樺山資紀は之をじつと見て居れず、自ら西京丸に乗つて出動して來たのであつた。

九月十六日夕、根據地を出た我艦隊は、翌十七日午前十時半頃海洋島附近に於て、定遠・鎮遠以下の清國北洋艦隊を發見した。見れば、敵は東洋無雙を誇るこの二艦を中央先頭に据ゑ、十數隻の軍艦・水雷艇を後方にひかへてV字型の逆、所謂凸横陣で堂々と進んで來る。それに對して、わが伊東長官の作戦は、飽くまで正々堂々たる全艦隊一列の縦陣で當つて行つたのである。

彼がの艦艇の間に砲戦が交へられ、始めたのが午後〇時五十分過ぎ、此所に、所謂黄海の海戦となつたのである。

激烈な砲火の應酬が行はれ、敵艦を爆破する一方、我比叻・赤城・西京丸も亦續々と敵の重

圍に陥り、苦戰奮闘した。殊に、伊東の乗つた指揮艦たる松島は、高く將官旗を掲げて本隊の先頭を進航した爲め、猛烈な敵砲火の集中射撃を受けた。その爲め、松島は水壓管を傷つけられ、水雷室を撃たれ、砲架は悉く破壊され、火薬は爆發した。將士の傷ついて斃れる者が續々とあつた。かの佐佐木信綱博士作「勇敢なる水兵」の軍歌にある。

「呼びとめられし副長は、彼のかたへに佇めり、聲を絞りて彼は問ふ、未だ沈まずや定遠は、」
といふ勇敢なる水兵の悲壯な最後の光景は、この時の松島艦上の出來事であるといふ。

伊東は、盛に飛來する彈丸の中を艦橋に立つて、雙眼鏡を擬して、戦況を監視してゐた。その時定遠から打ち出した三十センチ半の巨彈が、橋下に命中して爆破した。

「あッ！」と將士が、伊東の身を案じて橋上を見ると、濛々たる硝烟の中に、伊東は矢張り元の位置にゐて、徐ろに雙眼鏡を下して、

「エライことをやり居つた。馬鹿の大砲でも彈丸は當ると見える」と言つて、體軀を揺り、呵

々大笑した。見る者、その豪膽に驚くと共に、勇氣百倍したといふ。

然し、松島の損傷は殊の外ひどく、戦闘力は著しく減退し、舵機にも故障を生じたので、

伊東は、鮫島員規參謀長及び島村速雄參謀の意見を納れて、松島の橋上に「不管旗」を掲げて、最早指揮出来ぬから各艦任意の行動をとれと命令して、列外に出て敵より遠ざかった。

激戦は午後五時過ぎまで、続けられたが、敵は、經遠・致遠・揚威・超勇の四艦を失ひ、廣甲は大連灣に逃げて自ら焼き、定遠・來遠・平遠は大火災を起し、其他の諸艦も皆損傷した。我艦にも損傷はあつたが、一隻も沈没することもなかつた。

勝敗既に決して、夕暮れ近く、定遠・鎮遠は敗殘の諸艦を率ゐて、威海衛に向つて逃げて行つた。伊東は、敢て追撃して全滅させやうとはせず、我艦隊を整へて根據地に歸つた。こゝにも、伊東の性格がよく現はれてゐると思ふ。これに就きロンドンタイムスは、

「この退陣は、伊東長官の深慮のあつたところで、海軍將校の最も習ふべき所である（中略）」

伊東長官が、一時の奇勝に驅られて輕率な舉動のなかつたのは、寧ろ稱揚すべきである」と論じた。

威海衛の攻撃

黄海の海戦の勝利の結果、敵の北洋艦隊を全く屏息せしめ、黄海の制海權を我海軍の手に納めたから、我陸軍は思ふ儘に戦ふ事が出来、金州・旅順を相次いで陥れた。然し、殘餘の清國艦隊は威海衛灣内の劉公島の影に隠れて、我艦隊を牽制した。そこで我軍は、陸軍をして威海衛の背面を衝かしめ、聯合艦隊をして前面から敵海軍を攻撃する策を採つた。伊東は、この策に基づき、威海衛港口に近づき示威運動を試みると共に、怒濤を冒して連日連夜敵艦の脱出を

警戒した。

二十八年二月五日、伊東は、暗夜に乗じて水雷艇をやり、港内の定遠を襲はしめた。翌日になつて見ると、定遠は巨體を傾けて擱坐してゐた。

六日に、又、水雷艇をやつて、來遠・威遠及び小蒸汽船一隻を撃沈させた。七日、大舉して劉公島・日島を砲撃し、敵の水雷艇數隻を拿捕した。八日より十日迄、休む間もなく砲撃して敵を脅かした。

敵の敗色歴然となるや、伊東は舊知の間柄である敵提督丁汝昌に、情誼を盡くした勸降狀を送つた。

十二日、敵は白旗を掲げて、降服を乞ふて來た。伊東は其降服條件の大體を承諾した返書と共に、シャンパン・葡萄酒各一ダースと干柿を軍使に托して贈り陣中の犒ひとした。この時、旗艦に於ける我幕僚會議では、敵の將校を捕虜にせよとの意見があつたが、伊東は、之を排し

て、

「日本武士道の精神を世界に示すのはこの時である」と言つて、丁汝昌の乞を納れて、敵將校を捕虜としない旨返事したのだつた。

翌十三日午前八時、敵の軍使は約束の通り、丁汝昌の返事の書翰を持つて來て、伊東に手渡すと共に、

「丁提督は、この書翰を書き終ると共に、責を負つて毒を仰つて瞑目しました」と告げた。伊藤は、深い感慨をもつて丁の書面を見ると、先づ伊東の寛大な處置を謝し、將校兵卒の生靈を救はれんことを乞ひ、武装解除、兵器砲臺、艦船引渡しの方法期日を細々と明確に書いて、更に「御寄贈下されし三品、兩國有事の際に私受することは出来ませんから、感謝をもつてお返しします」との意味が述べられてあつた。實に、敵乍ら立派な態度であつた。

伊東は直ちに信號で我艦隊に丁汝昌の死を告げ、奏樂を停止させ、將官の禮を以て敵の提

督の死に弔意を表した。

それから談判に移るや、我方の條件たる、降服した清兵は竹島に上陸させ吾護衛兵をつけて戦線外に送るといふ一條に、敵の使節は、

「我清國の兵卒は、不規律であるから、途中で異變があつては困るから此一條だけ除去して頂き度い」と言つた。伊東は、怒つて、

「降服した兵士は、もとより捕虜として送還すべきである。それを、特に、放してやつて郷里に歸らせるのは、この上ない寛宥である。殊に戦線外に護送するのは、萬國公法の認めるところではないか。この一條を除去することは出来ぬ」と言つた。敵使は已むを得ずとして歸つた。然し、翌十四日來た時に、又、

「降兵護送の一條は諸兵から除去を講求されて困ります。どうか劉公島から海路芝罘に行くことを許して頂き度い」と哀願した。伊東は、嚴然たる態度で、

「一旦軍司令部と協議して、決定したものを、今に至つて變更することは出来ぬ」と、斷乎、其乞を退けた後、更に語を更めて、

「丁提督の行爲は全く見上げたものである。武將として全く間然する所がない。自分は、情に於て全く斷腸の感に耐へぬ。聊か弔意を表する爲に、汽船康濟號を呈して、丁提督以下の棺を載せて外國士官及び清國軍人の便乗を許し、其の欲する所に航行せしめやう」と言つた。つまり、丁汝昌の棺を護送するといふ名分のもとに、清國將兵の自由行動を許したのであつた。敵使は、此情理共に備はつた伊東の言葉を聞き、感激して、聲をあげて泣いたのであつた。

十七日午前八時、威海衛灣中に於て捕獲式が行はれた。この時我軍艦旗を掲げる船艦凡そ四十隻で、其威容は港の内外を壓した。海陸相和す我軍の萬歳の叫びは、海も山も動かした。その折しも、午後四時、丁汝昌の柩を載せた康濟號は、蕭條と降る春雨の中を港外へと去つて行くのであつた。我艦隊からは弔砲を放ち、全將兵堵列してこれを見送つた。實に美しい光景で

はないかし

當時、伊東が獨斷で分捕艦船の中から康濟號を與へ、敵將兵の便乗を許したことに就て、越權行爲であると非難するよりも、機宜を得た處置として賞讃の聲が高かつた。

この一事によつて、特に伊東の日本海將としての名は一段と光輝を放つたのである。

威海衛の勝報、一度天聽に達するや、聯合艦隊に優渥なる勅語を賜はつた。

三月四日、伊東が宇品に凱旋するや、即日、大元帥陛下の召見を賜り、金時計を賜つた。

もろともに立てし功を己のみ世にうたはるゝ名こそつらけれ

當時の伊東の感懐である。

戦後、伊東は、各地の戦歿部下將兵の墓に詣で、遺族を慰め、或は、遺兒を撫育した。

榮 達

伊東は間もなく、海軍々令部長となり、勳一等功二級に叙せられ、子爵を授けられた。

三十一年、大將に進み、山本権兵衛が海軍大臣を止める時、伊東に次の大臣の交渉をしたが己れを知る伊東は政治家になる任にあらずと辭退した。

日露戦争の時には軍令部長として奔走した。功により功一級を賜ひ、伯爵に進められた。

戦後の三十八年十二月、任を東郷平八郎に譲つて、軍事參議官の閑職に收つた。

三十九年、元帥府に列せられた。

伊東は、斯様に榮達したが、平生邊幅を飾らず、常に質素な服装をして、よく百姓爺と間

違はれた。

眞夏の暑い盛りには、シャツ一枚になり、鍬を執つて、書生と共に溝の掃除をしてゐたこともあつたといふ。

大正三年一月十六日、天壽を全ふして、七十二年の生涯を静かに終へた。

山本權兵衛

明治の海將と制限せず單に、偉人を語る場合でも、山本權兵衛は、必ずあげなければならぬ人だらう。日清戦争後も、未だ陣容整はざる我海軍を、日露戦争迄に、あれ程の堂々たるものとしたし、東郷平八郎を司令長官に拔擢して、その手腕を充分に振はしめ、あの大捷を得ることが出来たのは、實に山本の力によるのである。山本は、海相の任にあること十年近く、内閣の首班に坐すること二回である。

彼は、辯舌に優れ、直截明快、才氣煥發する上に、燃え上る情熱と強い信念に従つて、どしどし事を運んだ。如何なる仕事にも先づ、自分が第一線に立たなければ我慢が出来なかつたのである。

優秀な人物は、どしどし拔擢し、無能と思はれる人は容赦なく罷免した。明治二十三年には一時に、九十七人の將校を誅つたのである。その爲、彼の反對者も可成りある。

山本を批難する人は、山本が藩閥、閥閥に據つて人を登用したといふ。然し、事實は、山本

は餘りに人材主義で、他藩よりもどしどし／＼拔擢したので同じ薩摩藩の人に怨まれた位である。或は、傲岸不遜、暴虐馮河の人物と言ふ人もあるが、山本は、事を行ふに當つては、先づ、細密極る用意をしてから、斷乎として實行したのである。

山本が薨じた時、賜はつた誄詞の冒頭に二句、

炯眼人ヲ知りテ克ク任シ 豪膽事ニ當リテ善ク斷ス

に、畏きこと乍ら、山本の人物が、活寫されてゐるのである。

少青年時代

山本は、嘉永五年十月十五日、鹿兒島に生れた。父は、藩の祐筆であり、且、槍術の師範役

であつたが、山本の幼時亡くなつた。母は、なか／＼立派な婦人で、女丈夫の倅があつた。

權兵衛は、四人兄妹の三男であつた。

文久三年の薩英戦争の時には、權兵衛は十二歳であつたから、戦線の後方で彈丸運びなどの雑役に服した。

權兵衛は、その頃から勇敢であつた。薩摩藩では、罪人が打首になるや、直ぐ駆けつけて、生肝を取る競争があつた。里見氏の小説にある「ひえもんとり」だ。少年の權兵衛はその時には、何時も一番であつたといふ。

慶應三年、薩摩藩兵が上洛する時、次兄吉藏（山本英輔大將の父）も志願して従軍した。それを見た權兵衛は羨ましくなつて、藩廳へ行き、従軍の許可を願つた所、十八歳以下の者は許されぬと言はれた。そこで、大柄な權兵衛は、その時十六歳であつたが十八歳と偽つて従軍した。

権兵衛の姉の榮子は、島津家の奥に仕へてゐるが、母に似てしつかり者で、権兵衛の出陣を祝つて、小倉の晴着を拵へてくれた。

権兵衛は、それを着て、喜び勇んで上洛したのであつた。

「あの時は、實に嬉しかつた」

と、彼は、後年、屢々述懐したといふ。

山本は、その姉を死ぬまで、よく面倒を見たのであつた。

上洛した吉藏と権兵衛は、所屬部隊が違ふので、別々に宿泊してゐるが、慶應三年十二月二

十八日、愈々、鳥羽伏見の戦ひに出陣するといふ前の日に、兄弟は、権兵衛の屯所である相國

寺別院に會して、

「戦ひに出ては、勿論、命を投げ出すのであるか、死ぬにしても鐵砲傷では有難くない。刀傷

にしよう」と誓ひ合つた。

二人は別々になつて、権兵衛は鳥羽街道を進撃した。

彼は、後年、當時を語り、

「あの時は、川村（純義）隊長が劍を抜いて、進め進めと號令したが、俺は満十五歳にならな

い少年だつたから、どうも、なかく進み難かつたよ」と言つて笑つてゐる。

権兵衛は、更に、錦旗東征に従つて、越後庄内に轉戦し、翌、明治二年の函館戦争には小斥

候として従軍した。

山本が實戦に参加したのは、十代のこの時だけで、而も、陸戦に従つたのであつて、彼は、

海軍大將、海軍大臣になり乍ら、一度も海戦に参加しなかつたのである。

維新の戦争が済むと、権兵衛は、海軍修業生といふのに藩から選抜されて、西郷隆盛の添書を懐にして上京し、勝安房を訪ねた。勝は山本に會つて、黙つてその希望を聞いてから、何故か、

「それは止めたがよからう。海軍兵學寮に入るといつても、それには英語だの數學だのを學ばねばならん。折角、西郷さんの紹介だか、海軍は斷念して他の方面を志してはどうか」と言つた。

然し、山本はそれに懲りず、三度四度と勝を訪ねて、遂は勝の書生となつた。居ること一ヶ月にして勝の許を辭し、開成所と昌平費に學び、三年十一月、希望の海軍兵學寮に入つた。五年八月には、成績優秀で、中卒田倉之助兵學頭から表彰された。

その頃で有名な話は「汚穢で飲んだ」といふ一件である。

それは、その頃、海軍寮の糞便を百姓に賣つて、その金で、教官と事務員が酒を飲むことになつてゐた。

それを聞いた山本は、憤慨して、その宴席に行き、

「生徒がたれた糞を賣つた金で、生徒をさし置いて酒を飲むとはけしからん。生徒達にも飲ま

すべきだ」と談じ込んで、遂に生徒を皆引き入れて大いに飲んで騒いだのであつた。

山本は、晩年になつても、屢々、

「あの糞代で飲んだ酒程うまいものには、その後行きあたりなかつた」と言つてゐたといふ。

また、その頃山本は、相撲取にならうと思つた。彼は少年時代から相撲が強く、宮相撲では「花車」といふ力士名を持つてゐた位だつたので、當時薩摩のお抱力士で、驍名一世に高い横綱陣幕久五郎に弟子入りしようとして、却つて久五郎に諫められたといふ話がある。

七年、西郷隆盛が征韓論に破れて故山に歸るや、西郷を崇拜する山本は、學校へは、病母看護といふ名義で、西郷の後を追つて薩摩へ歸つた。薩摩に着いても、山本は、自宅の前は素通りにして、桐野利秋、篠原國幹の兩先輩を訪ねて意見を述べた。

桐野、篠原は、大いに山本の意見に賛成して、鼓舞激励した。

それに元氣付いて、山本は、西郷を訪ね、大いに抱負を語り、西郷と行を共にしたいと述べ

た。

すると、西郷は、大きな眼で、山本を睨んで、

「それはあんたの心得違ひぢや、將來帝國海軍の重鎮にならなければならないあんたが、こんなことで輕舉妄動してはいかん。今日は、あんたが歸國するやうな時ではない。あんたは、將來の爲、大きな野心を抱いて、専心學業を勵み他日の大成を期しなさい」と懇々と諫められた。

この大西郷の言葉を骨身にしみて聞いた山本は、この時以來、眞に帝國海軍に全身全靈を打ち込む固い決心をしたのであつた。

然し、山本が、西南戦争の時、日本にゐたならば、或は西郷の許に馳せ参じてゐたかもしれないのである。幸ひ、その時、山本は、海外留學を命ぜられて、日本にゐなかつたのである。

西郷の訓戒に従つて、再び、兵學寮に歸つた山本は、七年、二十三歳の秋、優秀な成績で卒

業して、海軍少尉補に任命された。

翌年筑波艦に乗組み、日本環海航海の後、サンフランシスコに行き、翌九年歸朝後海軍兵學校に入學を命ぜられた。

十年、航務研究の爲ドイツへ行き、十一月ドイツ軍艦ライプチツヒ號に乗じて、南米方面へ遠洋航海に出た。

十一年、ドイツは、中央アメリカのニカラグアと紛議を起し、ライプチツヒ號をその地に赴かした。ライプチツヒ號からは、陸戦隊を上陸させ、野砲二門を持つて戰場へ行くことになつた。

この時、艦長は、山本の腕前と人物を見込んで、一門を彼に指揮させやうと思ひ、この旨をドイツ政府に上申し、同政府より我政府に電報で紹介があつた。その時、我海軍省では、

「それは困る。山本少尉を留學させてあるのは、將來我海軍の要部に當る爲であるから他國の

戦争に従事させることは出来ない。やむを得なければ退艦歸國させよう」と決議して政府に回答した。その結果、山本は、パナマで退艦して歸國したのである。

然し、これによつて、山本が青年時代から如何に有爲な人物であつたか覗ひ知ることが出来るよう。

歸朝後、山本は、扶桑、乾行、龍驤、淺間、浪速、高雄に乘組み、その間、伊東祐亨、樺山資紀に従ひ、二度歐洲へ渡り、累進して二十二年には大佐となり、二十三年高千穂艦長となつたのを艦上生活の最後として二十四年海軍大臣官房主事に補せられ以後専ら軍政に携はつた。

權兵衛大臣

山本は、二十六年に海軍省主事に補せられた。

當時、海軍大臣は西郷從道であつた。

從道は、清濁合せ飲む漢々としてつかまへ所のない大きな人物であつたので、陸軍出身ではあるが、内務大臣、陸軍大臣、農商務大臣、海軍大臣と何でもやつてゐる。

山本は、從道が海軍大臣になると、海軍軍政に關する概略を認めたと一通の書類を從道に閱覽を求めた。

數日後、

「お讀みになりましたか」と訊くと、西郷は、

「いや」と答へた。

更に、數日後、訊くと、西郷は、

「山本さん、私が海軍のことが分るやうになると、皆が困りはせんか。あんた方専門家が良

と決めたことは、私はその儘内閣で通してくれるやうにするだけでいいではないか」と言つて笑つた。事實、西郷は、伊藤、山縣とも對等の元勳で、閣議でも無理がきいた。山本は、この時の西郷の言葉以來、更に一層海軍軍政の研究に勵み、實行に當つては、西郷の力をかりた。

西郷も、議會や閣議で細かな質問を受けると、

「待つてくれ。それは俺も知らんから、山本に訊いてくる」と臆面もなく言つて、又、それを實際に行つた。その爲に山本は、大佐の時に既に、人々から「權兵衛大臣」と言はれてゐた。

日清戦争が起るや、山本は大本營海軍大臣副官として大本營に在つたが、宣戰布告に先立ち浪速艦長東郷平八郎が英國商船旗を掲げた高陞號を撃沈した上海電報が入つた。

時の總理大臣伊藤博文は大いに驚き、山本大佐を呼び付けて、

「海軍は飛んでもないことをした」と激昂して机を叩いた。餘り勢が激しかつたので、机上

のコツプが飛んで床に落ちた程だつた。然し、山本は、悠然として、

「海軍省には未だ公電がありませんが、東郷のやつたことならば不用意なことはありません。浪速が英船を沈撃したのは相當の理由があつたこと、思ひます。冷靜に事の真相を究め、着實なる判断を以てすれば、國際問題となつても左程心配するに當りません。」と答へたので、伊藤も安心したといふ。

事實、高陞號事件は、山本の言つた通り、大きな問題とはならなかつた。

これにより「權兵衛大臣」の名は益々擧つた。

第三次伊藤内閣（三十一年）の閣議に、西郷海軍大臣が海軍補充計畫案を提出した。

その豫算合計二億圓に近い數字を見て、大藏大臣井上馨、總理大臣伊藤博文も啞然とした。實に、その頃の歳入は八千萬圓程度だつたからだ。

餘りの桁外れの數字に、井上馨もムツとして、

「西郷さん、あんた、もう少し眞面目になつてくれねば困る」と言つた。

「ほう、何が不眞面目だ？」と西郷が訊いた。

「この尨大な豫算は本氣の沙汰か、こんなことが出来るか」

「あんたは海軍のことを知らぬ。海軍としてはどうしてもこれだけ要るんだ」

「如何にも私は海軍のことは知らん。それぢや一つ素人の私にも分る様に案の内容を説明して下さい」

「いや、そいつは、俺も知らんがね、然し、山本をやるから、よく聞いて見なさい」

そこで、山本は、翌朝十時、一抱への書類を持つて藏相官邸に乗り込み、井上が現はれるや、突如、日清戦争後の三國干渉に熱涙を飲まされたのは、日本海軍力に缺陷があつたからだと説き、世界の形勢、ロシアの現状を論じ、滔々と果てることがなかつた。

正午も過ぎ一時になつたので、井上が食事をしようと言ふと、

「もう少しです」

と言つて、喋り續けて、遂に、夕方の五時迄、ぶツ續けて喋つて、たうとう、井上をしてこの大豫算に賛成させた。このお蔭で、日本海軍は日露の役に決定的な大勝利を得たのである。

井上は、後に、

「いや、その論旨より根氣に驚いた。黙つて聞いてゐたら夜通しでも喋つたかも知れない。海軍には途方もない奴があるもんだ」

と感歎したといふ。

その頃、部下の局課長達は、書類に山本のサインを貰ふと、

「帆掛船が出たからもう大丈夫だぞ」

と言つて、既に、大臣の許可を得たと同様に喜んだ。帆掛船とは、山本のサインが帆掛船の

形に似てゐたからだった。

日露戦争の功績

三十一年五月、山本は中将に進み、その秋十一月には、次官を飛び越えて、一躍西郷に代つて、第二次山縣内閣の海相の椅子に就いた。それから、第四次伊藤内閣、第一次西園寺内閣、第一次桂内閣と内閣は變つたが、山本は、この間、足掛け八年間海相を続け、所信をどしく断行した。伊藤でさへ、山本の氣魄には押され氣味であつたといふ。

日露戦争を前にした三十六年十月、山本は當時、部内の評判のない、人に目立たぬ舞鶴鎮守府司令長官東郷平八郎に招電を發した。

東郷が山本の私邸を訪れると、山本は、東郷に常備艦隊司令長官に就任してくれまいかと言つた。

當時、日露開戦を目前にして、常備艦隊司令長官は、我海軍を一手に引き受ける重大な位置だつた。

その大役を頼まれた東郷としては、嬉しかつたに違ひないが、

「然し、俺がそれになると、柴山さんや日高さんが故障言ひはしまいか」と言つた。

それは、當時、佐世保鎮守府司令長官海軍中將柴山矢八と常備司令長官海軍中將日高壯之丞のことを言つたのだつた。二人共、實戦派の猛將として、部内外に聞え、二人共、山本や東郷の先輩だつた。若し、戦争が起るならば、この二人の内一人が聯合艦隊司令長官になることは、自他共に疑はなかつたところである。東郷の心配したのは、その事であつた。然し、山本は、

「あんたさへ承知してくれば、その方は俺が上手くする」と言つた。そこで、東郷も、山本の申出を喜んで受納れた。

次いで、日高壯之丞を呼んだ時には、さすがの山本も、容易に要件を切り出せなかつた。

然し、言はない譯にもいかぬので、山本が、東郷と入り代つて貰ひ度いと言ふと、激昂した日高は、劍を差し出して、

「山本、これで俺を殺せ」とまで、言つたといふ。然し、山本は、熱誠を盡して、

「君の困つた性格は、輕はずみで、自負心が強いといふ事だ。人の言ふ事を聞き入れず勝手な行動をする點だ。日露交戦となつた場合、用兵作戦の大方針は大本營で決定の上、出先の司令官に示達するのだが、君は氣に入らぬと中央の命令に従はぬ危険性がある。それでは困る。東郷にはさういふ所はないのだ」と、説き去り、説き來つた。

その熱誠に動かされて日高も納得したのであつた。

日高は後日、この時の山本の、面を冒して缺陷を指摘してくれたことを率直に感謝し、君國の爲一層滅私奉公を祈るといふ手紙を山本に送つた。山本がそれを伊藤に見せると、伊藤も感激して全閣僚に見せたといふことである。

かくして、日露開戦前に大冒險的な司令長官の更迭が行はれたのであるが、その決果は、我がよく知つてゐる通りである。

更に、山本の日露戦争に於ける大なる功績は、十年間懸命に戦争の爲の準備をしてゐたが、火蓋を切る迄戦意を絶対に他に洩らさないように極度の注意をしたことである。

また、軍艦は、早く數を揃へる爲と對外關係上、英佛獨に注文製造させたが、それに具へる砲は總て英國のアームストロング會社に納めさせた。

その爲、莫大な彈丸消費にもかゝはらず、その補充に滞りがなかつたのである。この邊に

山本の緻密な頭の働きの見ることが出来るのである。

宰相となる

日露戦後、二十九年一月海相の椅子を退き軍事参議官となつた。

戦後の行賞は、戦陣に臨まずして、功一級金鵄勳章を賜つた。

四十年、伏見宮貞愛親王に随行して英國に行き、當時進行中であつた日英同盟改訂に伴ふ第二次軍事協約を遂げた。

歸途ベルリンへ行き、カイゼルに謁見した。

カイゼルは、その日觀兵式の豫定があるから時間は五分といふ約束であつたのを、山本は得

意の辯舌で四十分間以上も話した。

カイゼルは、頗る喜んで、

「ドイツで何か見たいものはないか」と訊いた。

「ございません。然し陛下、ドイツで何か私に見せて下さるものがあるのですか」

と山本は答へた。

この答はひどくカイゼルの自尊心を傷けた。

「クルツプ機密工場を見せよう」

「折角の御好意有難く存じます」

かくして、山本は、ドイツが世界に誇るクルツプ工場を見たのであつた。この時、カイゼルは、山本の偉さに感歎して、喜色満面、手づから赤鷲大勳章を取つて、山本に與へたのであつた。

歸朝後、第三次桂内閣が護憲運動で倒れた後を承けて、大正二年、大命に依り内閣を組織した。

山本は、明晰な頭脳と斷乎たる實行力とで、多年懸案の行政財政の整理、軍部大臣の現役武官に限るといふ制限撤廢、文官任用令の改正など着々内治を刷新して、政治的手腕を揮ひつゝある時、部内に收賄事實であるといふ例のシーメンス事件に遭ひ、經綸を充分行はずして挂冠した。次いで待命を仰付けられた。

この時、山本に少しも罪が無かつたことは、東郷元帥が絶対に保證してゐることも明らかである。その後、山本は悠々自適の生活を續けた。

その頃の山本は、矢張り、若い時の艦上生活の習慣で、洋服はすべて自分で整理し、着物の綻びでも、靴下の破れでも、専用の針箱を備へてゐて、器用に自分でやつた。

眼が薄くなつても、眼鏡を掛けて、茶碗の尻をあてゝ靴下を繕つてゐた。家人が代らうとす

欠

MISSING

餓鬼大將

伊豫の松山の町は、加藤嘉明が築城した城山を中心としてその周圍に擴がつてゐる城下町である。城山の東麓の一角に東雲神社といふのがあり、その近くに、舊藩時代徒行侍が住んでゐた中歩行町といふ屋敷町がある。

明治初年の或る夏の黄昏時、その中歩行町の一軒の家の母屋で、十歳許りの少年が、如何にも武士の妻らしい凛とした母親に叱られてゐた。

少年は、小柄であつたが、體はガツチリ締つて、眉が濃く、眼が鋭く、鼻が高くて、キツと口を噛みしめ、見るからに精悍な餓鬼大將の面魂をしてゐた。

「淳五郎、お母さんもこれで死ぬから、お前もお死に」

母親は、突然、少年に短刀を突きつけた。淳五郎と言ふのは秋山眞之の少年時代の名であつた。

秋山少年は、何時も悪戯が過ぎて母親に叱られてゐた。中歩行町の近くの東雲町は町家の町だつたので、中歩行町の子供と東雲町の子供は、「士族の息子と町人の息子」といふ階級的對立で、何時も喧嘩してゐた。石をぶツつけ合つたり、竹切れや木片を持つて殴り合ふといふ有様だつた。淳五郎は喧嘩が強かつたので、士族の方の餓鬼大將だつた。従つて、よく、相手の子供を泣かして、その度に子供の親から母親の所へ抗議を持ち込まれてゐた。

然し、今日は、喧嘩で叱られてゐるのではなかつた。

数日前、秋山少年が近所の櫻井氏の家へ行くと、岩戸流、宇佐美流の煙火傳書といふ花火の火藥調合法を書いた書物があつた。直徑二三寸の花火筒もあつた。そこで、秋山少年や他の悪

戯小僧達は大喜びで藥を合はして花火を作り、近くの野原へ持つて行つて揚げた。揚げると、ドーンと音がして、「流れ星」や「垂れ柳」に開くので少年達は手を打つて喜んだ。然し、花火を揚げるには、大人でも警察の許可を受けなければならぬのに、少年がやつてゐるので、巡査が早速飛び出して來た。すると、素早い秋山少年は、他の子供達を連れて、すぐ逃げ出してしまつた。翌日、又やつてゐると、又、巡査が來た。その内、巡査から逃げて姿を晦ます方が面白くなつて、毎日悪戯を繰り返してゐるうちに、たうとう捕まつて、大目玉を喰つたのである。

餘りの亂暴に、遂に、母親が短刀まで持ち出したのであつた。

然し、秋山少年は、悪戯もひどかつたが、勉強の方も優れてゐた。

父親の平五郎が舊藩時代の徒行目付であり儒者でもあつたので、幼い時から、厳しく學問を教へられた。その上、土地の儒者近藤元修の近藤塾へ通つて孟子や論語を習つた。

また、繪を書くのも上手く、他の子供の風、牛若丸と天狗とか頼光の鬼退治、坂田の金時などを描いてやつてゐた。

和歌は歌人井手正雄に學び、幼い時から可成り上手かつた。眞之が七八歳の頃の歌に、

雪の日に北の窓あけシシすれば

あまりの寒さにチンコちとまる

といふのである。

幼い時から穎敏の譽れ高かつた。彼を二歳の時から世話した婆アやのクマさんは、「淳さまは八幡様の申し子ですよ」と頻りに吹聴してゐた。

明治元年生れの眞之には、上に四人の兄があり、下に一人の妹があつた。三番目の兄の信三郎好古は、後の陸軍大將秋山好古であつた。好古將軍は後年「典型的な古武士だ、もう今後あつた人間は種切れになるだらう」と上原元帥が言つた程立派な武人であつたが、少年時代

は、弟の眞之の餓鬼大將に反して、何時も涙を垂らした泣き蟲であつた。

母親の貞子は、何時も、この二人の對蹠的な兄弟のことを考へ、

「二人前の人間になつてくれるかしら」

と心を痛めてゐたのであつた。

青年時代

眞之が十五歳の時、兄の好古が、

「田舎にゐては立派な男になれない。東京へ出て來い」と言つて、呼び寄せた。

その頃、好古は、陸軍士官學校を出て下級將校になつてゐた。當時、「貧乏少尉にやりくり中尉」といふやうな俗語があつた程、少中尉の生活はみじめであつたが、弟思ひの好古は、眞之の將來の爲に彼を呼び寄せ、麴町番町の下宿に同居させて、學問をさせたのである。

その頃の好古の眞之に對する教育方針は嚴格を極め、新聞などは絶對讀まさず、如何に寒くても足袋も履かさなかつた。或雪の日、眞之が玄關でグス／＼してゐると好古が出て来て、「何をしとるんぞ」と訊ねた。

「下駄の鼻緒が切れとるから直しとります」

と答へると、

「跣足で行けッ」

と呶鳴られたといふ。

眞之は、後、人に語つて、

「自分がこれまでになつたのは、陸軍の兄のおかげです」

と言つてゐた。

間もなく、眞之は、今の一高の前身である大學豫備門に通ふやうになると、好古の下宿を出て、同郷の親友正岡常規と一緒に神田猿樂町に下宿した。正岡常規とは、後の近代俳壇の先覺者子規である。

その頃の二人の生活は、豪放磊落で、寧ろダラシ無い方に近かつた。

英語を教へるといふ交換條件で、下宿の女中に晩飯のお汁のおかわりを貰ひ、箸を置くと、近所の小川町の小川亭といふ寄席へ行つた。その頃は、大きな下足札を呉れたので、眞之は、下手な落語家が出ると、近くの席の人の下足札を集めてカタ／＼鳴らして「ダメダメ」と呶鳴つた。後には、子規も眞之の眞似をするやうになつた。

また、眞之は、當時の青年が娘義太夫に血を湧し、寄席から寄席へ追つかけた所謂「どうす

る連」の一人であつて、その爲、淨瑠璃本を買つて来て、近松物などを頻りに暗誦してゐた。子規と無銭旅行をして失敗した話もある。子規は、隨筆「筆まかせ」に秋山のことをよく書いてゐる。

眞之が武人でありながら文筆に秀れてゐたのは、親友の子規の影響感化が多分にあると思はれる。

眞之の生活は可成り放埒であつたが、勉強を決して怠らなかつた。どんなに遅く、どんなに酔つて歸つても、彼は、必ず、机に向つて勉強した。屢々徹夜して勉強し、子規と競争したこともある。

眞之の勉強の要領がいゝことは、海軍兵學校へ入つても定評があつた。

彼は明治十九年十月に海軍兵學校に入つた。當時兵學校は築地にあり後に江田島に移つた。眞之は、築地で二年、江田島で二年の學校生活を送つた。彼は、入學した時は五十五人中十五

番であつたが、第一年の終から首席になり、遂に卒業する迄首席で押し通した。而も、彼は、莫勉強したのではなく、他の生徒以上によく遊び、よく食ひ、よく飲んで、非常に要領よく、勉強したのであつた。

眞之の要領のよい勉強法は、二十三年七月兵學校を卒業してから、「比叡」「龍驤」「松島」「吉野」などに乗組んで全国各地へ行つた時も續いた。彼は、港に着くと早速上陸して書物を買ひ込み、酒に酔つて歸つてから讀む。また吊らされた端艇の中などで、人に妨げられず豌豆をホリく、嚙り乍ら讀書して、讀んでしまつた本は賣り飛ばして新しい本を買つた。従つて、同僚上官なども、當時から、若い秋山少尉が古今東西の戦書を讀破して、要點をよく覚えてゐるのに驚歎したのであつた。

二十七年の日清戦争の時は、眞之は少尉で、第四遊撃隊の先任艦「筑紫」の航海士に過ぎなかつた。而も、その「筑紫」は、主力艦隊を離れて雑作業に従事してゐた爲、直接戦闘に参加

出來ず英氣勃々たる眞之は、髀肉の敷に堪へなかつた。威海衛攻撃の時決死隊の一員に加はり勇躍してゐたが、これも、強風怒濤の爲計畫が變更されて、實行されなかつた。

日清戦争は、眞之をして、その手腕を振はす機会がなかつたが、後年の眞之の戦術戦略研究の基礎となり、大いに役立つた。

戦後、眞之は暫く水雷方面に廻され、更に、海軍々令部牒報課員となり、朝鮮の洗濯夫に化けて満鮮の間で活躍し、其事情を探索して重大任務を遂行した。

その後引續いて眞之は、ロシア研究と對露作戦を熱心に繼續した。それに關する上申書のうち、作戦に關するものゝ一部は典範として、海軍省に今も保管されてゐるさうだ。

三十年、眞之は、海軍制度視察の爲め米國留學を命ぜられた。その時、既に俳名隆々としてゐた子規は、淋しい病床から、其行を送つて、

君を送りて思ふことあり蚊帳に泣く

の一句を餞した。

米國留學中は、有名な戦術家マハン大佐、グードリツチ大佐などに教へを受け、又、米西戦争にはニューヨーク號に乗り組んで戦況を視察したりして、大いに知識経験を磨きかけた。

三十五年七月、歸朝するや、海軍大學校の教官となつて戦術講座を擔當した。それ迄のこの講座では圖上演習であつたが、眞之は米國で得た新しい知識で、兵棋といふ將棋のやうなものゝを軍艦に擬して模擬作戦をする兵棋演習を行つた。然し、それは唯單なる一例に過ぎず、眞之の海軍大學教官時代の功績は、それ迄茫乎として何等の統一もなく、甚だ非科學的なものであつた我海軍兵學の諸項目を統合分類し、組織的な一科學を確立したことである。

そのうちでも、最も注目すべきは、兵術を戦略・戦術・戦務の三大種目に分ち、それを更に基本・應用に區別したことである。この區分法は、世界的に價値を認められ、中には戦務に關する項は、世界の海軍國である英國でさへも、その一部を採用してゐる。如何に眞之の戦術論

が秀れてゐたかを知ることが出来よう。

秋山軍學の根本精神は、敵を殺戮するのではなくて、敵を屈せしめる主義である。孫子の所謂「戦はずして敵を屈するは善の善なるものなり」といふのを基調にして獨創的戰略を編み出したのである。

その眞之の戰略には、日本古代の海賊戰法、伊豫の水軍の法などが、西洋式近代戰法の中に巧みに用ひられてゐた。

明治三十二年頃、眞之が末代大尉の時、胃腸病を患つて入院してゐた。寝てゐると、餘り退屈なので、彼は、見舞ひに來た小笠原長生氏に「何か面白い本はないか」と言つた。そこで、小笠原氏は早速五六冊の書物を眞之の許へ送つた。その中に「野島流海賊古法」といふ戰國時代の水軍戰法の寫本があつた。眞之は、これを非常に面白がり、更に、小笠原氏から、同じ古書である「海賊流」「三島流」「甲州流」「全流」等の書を借りて讀破し、それ以來、我國古來

の水軍戰術を研究したのである。日本海々戰の時の「七段の備」も「甲越戰法」にある「車掛り」の戰術を應用したものと云はれる。

眞之は、旺盛な讀書力で、今古東西の軍書類は殆んど皆讀破してゐたが、特に愛讀して參考としたのは、和書では「甲越の争ひに關する兵書」「山鹿流軍書」、漢書では「孫子」「吳子」洋書ではプルトメの「戰略論」等である。

日露戰爭の殊勳

日露戰爭の時、眞之は、聯合艦隊司令長官東郷平八郎中將、參謀長島村速雄大佐の下で參謀少佐として、その戰術を實地に應用する機會を與へられた。間もなく、先任參謀の有馬良橘中

佐が病を得て内地へ歸ると、眞之が推されて先任參謀となり、専ら作戰を立て、其の作戰の命令を立案した。

島村速雄が後に、「要するに當時の作戰の大小命令は殆んど秋山參謀の頭腦の手腕とに依らないものはなかつたといふも、決して過言ではない」と言つてゐるのを見ても、當時の眞之がどれ程活躍したか察することが出来る。

眞之は、旗艦三笠の甲板をポケットから豌豆を出してポリポリ嚙り乍ら名作戰を考へ、部屋へ入つては、湯に入る時の外は靴も脱がず、洋服も着換えず、ベッドにごろりと寝た儘、天井を睨んで考へ續けた。日本海々戰の迫つた數日間は、他の參謀が夜半に訪ねても、眞之はベッドの上で大きく眼を開いて、作戰を練つてゐた。

三十七年八月十日の黄海の海戰は、日本海々戰程華々しく喧傳されてゐないが、眞之の苦心は、この時の方が遙に大きかつたのである。

當時、我軍艦初瀬と八島とが敵の敷設水雷にかゝつて沈み、我艦隊は劣勢となつてゐた。而も、旅順港に入つてゐた敵の東洋艦隊を、バルチック艦隊が來ない前に、浦鹽へ逃がさず、黄海方面で撃滅しなければならなかつた。その上、我艦隊は、後から來るバルチック艦隊を迎へ撃つだけの餘力を残して置かなければならなかつた。實に、黄海の海戰は、日露戰爭の海戰の勝敗の岐れ目をなすもので、眞之は、この點に不眠不休の苦心經營をしたのであつた。彼は、後に、「黄海の海戰では、どう考へても我に勝目のある筈がなかつた」と述懐した程だつた。然るに、我旗艦三笠の大艦が敵彈に大破されながらも、この戰ひの結果は我海軍の大捷利となり、敵艦は大破して再び旅順に逃げ込み、復た戰ふ意氣を失ひ、逸走したものは撃沈又は武装解除となつた。

蔚山沖で上村艦隊が浦鹽艦隊を撃破したのも黄海の海戰に附屬する捷利であつた。旅順に逃げ込んだ敵艦は旅順陥落とともに我手に歸し、我艦隊は戰爭中に失つた海軍力を補足して餘り

の大捷利に、眞之は「最早此に至つては全然天爲で、吾々人間には何が善いやら少しも分らない」と言ひ、「之れを不可思議と謂はなければ、此の天地間に不可思議はなからう」と言つてゐる。

この黄海の大捷で、眞之の胸には、次に來るバルチック艦隊を迎へ撃つ確乎たる信念が出來たのに違ひない。バルチック艦隊を迎へるのに、眞之は七段構の戦法を以てしたといはれる。七段構とは、晝戦、夜戦の正攻、奇襲を交互に活用して、濟州島近海から浦鹽沖に至る海上を七段に分ち、夫々の區域に於て最も有效適切な攻撃を敢行して、敵艦隊を撃滅しようといふのであつた。

この作戦の大規模にして雄大なことは、古今の海戦に類が無いものだつた。然し、いよく日本海々戦が始ると同時に用ひられたのは、第二段から第四段までに過ぎなかつた。眞之にしてはあつてなかつたかも知れないが、それ程我海軍は思はざる大捷を博したのであつた。

その日、五月二十七日午前五時、南方哨艦の信濃丸から「敵艦見ゆ」の無電があり、午後一時五十分、有名な「皇國の興敗此の一戦に在り、各員一層努力せよ」の信號が發せられ沖の島附近で第一合戦の火蓋が切られたのである。かくて第一戦隊は暫く南西に頭を向け、敵と反航通過するやうに見せたが、二時五分、突如東に折れ、斜に敵の先頭を壓迫した。第二戦隊もこれに續き、第三、第四、第五、第六の諸戦隊は豫定より南下して敵の後尾を衝いた。

この所謂「丁字戦法」は、黄海の海戦にも用ひられ、東郷艦隊の定石なのだが、この時は、彼我餘りに近く、強いて旋回するならば、敵の猛射を浴びなければならぬことが分つてゐた。然るに、我艦隊は、敵前八〇〇メートルで、大膽不敵な逐次回頭を試みたのである。これを見た敵の旗艦スウォーロフの艦橋にゐたロジエストエンスキーの幕僚は手を拍つて、「我勝てり、東郷は氣が狂つた」と叫んで喜んだといふ。

然も、この海戦に於て、我軍が大捷を博した原因は、この開戦劈頭に大膽に針路を轉じて敵

の先頭を壓迫したことに在る。眞之は、後年、「日本海々戦の過半は追撃戦であつて、眞に勝敗を決したのは、最初の三十分間であつた」と言つてゐる。その通りで、砲撃が始まるや、我艦隊に壓迫された敵は、自由な行動がとれずオスラピア、旗艦スウオロフ、アレクサンドル三世と、瞬く間に次々と火を發して、戦列を離れて行つたのである。

かくて、曠古の大戦たる日本海々戦は、五月二十七日の午後から二十八日午後一晝夜續いた。最初日本海を通過しようとした敵艦は約三十八隻であつたが、殆んど皆撃沈捕獲されて、免れたものは、巡洋艦、驅逐艦、特務艦數隻に過ぎなかつた。それに反し、我艦隊の損失は、水雷艇三隻のみで、他は多少傷付いても、たいした事はなかつた。實に、世界戦史未曾有の驚歎すべき大捷である。その原動力となつた秋山參謀の名戦略を讃歎しない者はないであらう。

眞之は、「視界が狭くなり大局が見えない」と言つて雙眼鏡を一切用ひなかつた。

如何なる激戦の最中でも、彼は、實に冷靜に作戦を練つた。後に、そのことを人から問はれた時、眞之は、

「身は作戦の焦點にあるも、心は高く天上に在り、故に鐵火の興奮なし」

と答へた。

戦後、日本海々戦の顛末を書いた眞之の報告文は、また、名文章として有名である。

日露戦後の活躍

三十八年、戦後の帝國議會は、秘密會を開いて陸海軍から戦争経過の報告を聞いた。陸軍では、代表として松川少將を出したのに、海軍では、中佐の眞之が拔擢されてこの任に

當り、立派に役目を果して名聲を高めた。

戦後、眞之は、再び、海軍大學教官となり、青年の指導の戦術の研究に力を注いだ。

四十年九月の九州南部で行はれた海軍大演習では、眞之の判決は名判決として評判だった。

海軍大學教官二年餘で、四十一年、眞之は、「三笠」の副長に補せられ、再び海上生活が

始まり、「秋津洲」「音羽」「橋立」「伊吹」の艦長を歴任して、大正三年、大隈内閣の八代海相

の下に軍務局長となつた眞之は、八代海相の懐刀となつて、有名な海軍未曾有の大疑獄シ-

メンス事件の後始末に東奔西走した。

彼は、對支問題に就いても、大亞細亞主義の立場から、非常な關心を持つてゐた。嘗て、荒

川寛治伯や上原勇作元帥に、

「今のうちに支那と固い握手をしておかなければ世界大戦終了終に困ることになる。換言すれ

ば、我國に反對する遠世凱を倒し、我國に好意を持つ南方(孫文)を援助し、攻守同盟を結んで

おかなければならない」

と言つたといふ。

彼は、當時、孫文一派の革命運動に絶大な支援を與へてゐたのである。

大正五年、眞之は、軍令部出仕となり、同時に世界大戦視察のため渡歐を命ぜられた。

歸朝後、第二水雷戰隊司令官となり、大正六年七月、病氣療養のため海軍將官會議々員の

閑職に轉じ、十二月、中將に昇進したが、病氣がはかばかしくなく、待命を仰付かつた。

以來、只管、靜養に努めたが、その甲斐もなく、最後まで、國防と國內の思想問題を憂慮し

つゝ、大正七年二日四日の夜明け、五十一歳で亡くなつた。

最後の息を引き取る少し前に、「辭世といふほどのものでもないが」と言つて、

不生不滅明けて鴉の三羽かな

と口吟んだ。終りの「かな」は、はつきり聞きとれなかつたといふことである。

東郷平八郎

近代に於ける我國の世界的英雄をあげるならば、陸の乃木大將と並んで、海では東郷平八郎であらう。ロシアのバルチック艦隊を對馬海峡に邀撃して、完膚なきまでに撃滅した戦功は、ナポレオンの海軍を破つた、ネルソン提督にも優るとも劣らぬと言はれる。

然し、東郷平八郎の生涯を見ると、その華々しい戦功にもかゝはらず、多くの英雄達のやうな豪放なところもなければ才氣煥發するところもない。たゞ、至誠純朴恭謙の性格が一生を貫ぬいてゐるだけである。あの華々しい戦功の遠因の一つもそれであり、その大きな功績にもかかはらず、質素そのものゝ晩年を送つたのもこの性格からである。それが、國民から「東郷さん、東郷さん」と一種の親しみを持つて畏敬され、人氣のある所以である。伊東祐亨は、平八郎を評して「米の飯のやうな人物だ」と言ひ、樺山資紀は「平素は至極靜かで女性の如く見ゆるが、元來沈着にして決斷強く、軍人としては最も最適の人物だ」と言つてゐる。尾崎行雄は「余の大將に敬服するは、大將が蓋世の偉功を奏しながら毫も之を自覺せざるものゝ如くな

るにあり。其の鞠躬如たるは作意の恭謙に非ずして自ら其の功業の偉大なるを知らざるが爲なるに似たり（中略）曠古の偉勳を奏して之を自覺せず、是東郷大將の東郷大將たる所以にして所謂じみなる英雄の最上乘なるものにあらずや」と、評してゐる。而も、英國のキツチナー元帥が言つた通り、平八郎は「無言にして畏るべき提督」であつた。彼は、少年時代から、至誠純朴、無口で必要以外には喋らず、一步一步と努力して行つた人である。

青少年時代

平八郎は、弘化四年の年の暮、十二月二十二日、鹿兒島の鍛冶屋町に生れた。同じ町内の僅か七十餘戸の武家屋敷から、西郷隆盛・西郷從道・大久保利通・大山巖・黒木爲楨など、鏘々

たる明治の偉人を出してゐる。

平八郎の父吉左衛門は、水野流の剣法の皆傳を受け、文武兩道に秀でてゐた。誠實勤勉だったので、三十五歳の時、拔擢されて、郡奉行見習となり、次いで、郡奉行、高奉行となり、更に、御納戸奉行にもなつた立派な人物である。彼は、その頃、外國船がしきりに我海邊を窺ふのを痛憤して、

異國の船くつがへせ諸人の

祈る誠を知れよ神風

と詠んでゐる。平八郎は、この清廉潔白にして識見の高い父の影響を多分に、受けてゐるのである。平八郎の母は、益子といひ、若い頃「白梅の君」と呼ばれた程の麗人だつたが、賢母の譽が高かつた。夫婦の間に五男一女があり、平八郎は、その四男である。

平八郎は、幼名を仲五郎といひ、藩藩獨特の峻烈な準人式教育を受けた。仲五郎は、八歳に

なると、兄達と一緒に、毎朝、未だ薄暗いうちに起きて、近所の西郷吉次郎（隆盛の弟・従道の兄）の邸に行き習字の稽古をした。二時間許り習字をしてから家に歸り、母に髪を結つて貰つた。朝飯の後、日々順番になつてゐる友人の家へ行き四書などの素讀をした。それが済むと附近の甲突川へ走つて行つて、泳いだり、相撲をとつたりして遊んだ。その時の相撲相手には後の陸軍大將黒木爲楨や海軍大佐伊知地弘一があつた。腹をすかして家に歸り、晝食を済ますと、仲五郎は、藩の演武場に行つて、師範役丸半左衛門から、示現流の劍法を教はつた。夜は又、友達の家に集つて、軍書・傳記などの講讀をした。

由來、薩摩では、男子が生れると、赤ん坊の時から「一心こそ軍する身の命なれ、揃ふれば生き、揃はねば死す」といふやうな島津日新公の作つた「いろは歌」を子守歌代りに聞いて育ち少年達は、所謂健兒社に集つて勇武の精神を鍊り、五月十八日の夜は曾我物語、十二月十四日の夜は、赤穂義士銘々傳を讀み明して、大いに士氣を鼓舞する習はしがあつた。

母に似た白面朱唇の温和な少年だつた仲五郎も、かうした教育法により、次第に心身共に、鐵の如く鍛へられて來た。十歳頃には、川に泳いでゐる小鮒を幾匹も刀で切つたとか、父の愛馬に惡戯をしてゐて、頭に噛みつかれたので、棍棒で馬の顔を滅多打ちにしたとかいふエピソードが傳はつてゐる。

黒船渡來とか尊皇佐幕運動などで騒然たる内に、萬延元年になり仲五郎は十四歳となつた。この時、父は、早く出仕させる爲に、十五歳と稱して元服させ、前髪を落して、平八郎と改名させた。こゝに、仲五郎は平八郎となつて、藩廳に出仕し、書役を務め、一ヶ月玄米三斗俵一俵を支給された。家に歸つてからは、兄弟達と一緒に畑で野菜などを作つた。この頃、荻野流の砲術を習ひ、又、西郷小兵衛（従道の弟・隆盛の末弟）について陽明學を修めた。陽明學の知行合一主義は、平八郎の生涯に、可成り重要な指針となつたやうである。

文久三年七月の「薩英戦争」には、東郷家では、父吉左衛門をはじめとして、末子を除く兄